

岩手県埋文センター文化財調査報告書第37集

宮野目十三塚発掘調査報告書

(財)岩手県埋蔵文化財センター

宮野目十三塚発掘調査報告書

序

開発と埋蔵文化財の保護との調和をどのように図っていくかということが大きな課題となっております。

こうした埋蔵文化財を包蔵する地域の開発にあたっては、事前に関係各機関と綿密な連絡をとり現状保存に努めておりますが、やむを得ず現状保存できないものについては、事前の発掘調査を行って記録保存する方針をとっております。

昭和39年4月に開設された花巻空港はその後の交通需要の増大に伴い大型高速航空機の就航を可能にするための滑走路の拡張と施設の整備を目的とした花巻空港整備計画が策定され、それとの関連で事業地内に所在する周知の遺跡である「宮野目十三塚」を発掘調査することが県教育委員会の調整により決定し、昭和55年度に(財)岩手県埋蔵文化財センターが実施いたしました。

本報告書は、その調査結果をまとめたものであり、地元で古くから「十三森」として親しまれてきた「宮野目十三塚」の実態について貴重な資料を提示することができました。この報告書が研究者のみならず広く一般のかたがたに活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となることを願ってやみません。

最後にこれまでの調査、整理にあたって協力を賜わった、関係諸機関や地元民のかたがたに対し深く感謝申し上げます。

昭和56年12月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

遺跡名	宮野目十三塚
遺跡記号	MN80
遺跡所在地	花巻市東宮野目
事業名	花巻空港整備計画
事業主体	岩手県 土木部 港湾課 花巻空港建設事務所
調整機関	岩手県教育委員会 文化課
調査主体	(財)岩手県埋蔵文化財センター
調査担当者	主任専門調査員 国生 尚 専門調査員 畠山靖彦
調査期間(外業)	昭和55年4月10日～6月13日
調査対象面積	4,300m ²
協力機関	花巻空港管理事務所 花巻市教育委員会 東邦航空株式会社 花巻運航所

目 次

I	調査に至る経過	2
II	位置 地形 基本土層	2
III	調査方法	6
IV	遺構	9
	1. 1号塚(北4号)	18
	2. 2号塚(北3号)	20
	3. 3号塚(北2号)	22
	4. 4号塚(北1号)	24
	5. 5号塚(中央3号)	26
	6. 6号塚(中央2号)	31
	7. 7号塚(中央1号)	37
	8. 8号塚(南1号)	42
	9. 9号塚(南2号)	44
	10. 10号塚(南3号)	46
	11. 11号塚(南4号)	48
	12. 12号塚(南5号)	50
V	遺物	52
VI	まとめ	54

図 版 目 次

図1	位置図	4	図5-1	遺跡全景(南西から)	11
図2	地形図	5	図5-2	遺跡全景(北西から)	11
図3-1	地区割図	7	図6	北地区全体図	12
図3-2	遺跡全景(真上から)	7	図7-1	北地区全景(北から)	13
図4-1	遺跡全景(北から)	10	図7-2	北地区雨天後(北から)	13
図4-2	遺跡全景(南から)	10	図8	中央地区全体図	14

図9-1	中央地区調査前(南東から).....	15	図28-2	6号A-A'断面(南から).....	36
図9-2	中央地区調査中(南から).....	15	図28-3	6号B-B'断面(西から).....	36
図10	南地区全体図.....	16	図29	7号現況図.....	38
図11-1	南地区全景(南から).....	17	図30	7号平面、断面図.....	39
図11-2	南地区全景(南から).....	17	図31-1	7号現況(西から).....	40
図12	1号全景(西から).....	18	図31-2	7号現況(西から).....	40
図13	1号平面、断面図.....	19	図32-1	7号全景(西から).....	41
図14	2号全景(西から).....	20	図32-2	7号A-A'断面(南から).....	41
図15	2号平面、断面図.....	21	図32-3	7号B-B'断面(西から).....	41
図16	3号全景(西から).....	22	図33	8号全景(西から).....	42
図17	3号平面、断面図.....	23	図34	8号平面、断面図.....	43
図18	4号全景(西から).....	24	図35	9号全景(西から).....	44
図19	4号平面、断面図.....	25	図36	9号平面、断面図.....	45
図20-1	5号現況(南西から).....	27	図37	10号全景(西から).....	46
図20-2	5号現況(西から).....	27	図38	10号平面、断面図.....	47
図21	5号現況図.....	28	図39	11号全景(西から).....	48
図22	5号平面、断面図.....	29	図40	11号平面、断面図.....	49
図23-1	5号全景(西から).....	30	図41	12号全景(西から).....	50
図23-2	5号A-A'断面(南から).....	30	図42	12号平面、断面図.....	51
図23-3	5号B-B'断面(西から).....	30	図43	出土遺物、小銃の弾.....	52
図24	6号現況図.....	32	図44	出土遺物、銭貨.....	53
図25-1	6号現況(西から).....	33	図45	検地絵図.....	58
図25-2	6号現況(西から).....	33	図46-1	宮野目小学校当時の十三森.....	59
図26	6号平面図.....	34	図46-2	宮野目小学校当時の十三森.....	59
図27	6号断面図.....	35	図47-1	塚の間隔.....	60
図28-1	6号全景(北西から).....	36	図47-2	塚の平均的位置との関係.....	60

宮野目十三塚発掘調査報告書

I. 調査に至る経過

花巻空港は昭和39年4月1日に開設以来、路線の新設と増便によって乗降客数は年々増加している。このような状況に対応して、より大型高速航空機の就航を可能にするため、現空港（面積393,000㎡ 滑走路 長さ1,200m 幅員30m）を面積1,509,400㎡ 滑走路の長さ2,000m、幅員45mに拡張整備しようとする花巻空港整備計画が策定された。

事業の実施にあたり、用地内の埋蔵文化財について、県土木部港湾課と県教育委員会文化課との協議がもたれた。

協議の結果、遺跡の分布調査が実施され、3ヶ所の遺跡がさらに協議の対象となった。

第1は、宮野目方八丁遺跡である。これは地形等から判断して用地内に遺跡の範囲が入らないと推定されたが、なお念のために周辺部も含めた範囲について縮尺1,000分の1の地形図を作り、用地内の試掘と工事立会に対応し、状況に応じて協議をもつこととなった。

第2は、山の神遺跡である。これは縄文時代の遺跡で、すでに県立花巻農業高等学校の実習農場整備の造成をうけていた。又、位置的にも現状保存は不可能であるため事前調査を昭和52年に岩手県埋蔵文化財センターが実施した。

第3は、宮野目十三塚である。これは位置的に用地内での現状保存の可能性があったが、最終的には、新滑走路の地上高がかなり低くなることから、航空法に定められた転移表面内に遺跡が入るか入らないかの現地測量にかかっていた。

工事が進み、現地測量の結果、法に抵触することがわかったので、協議の結果、県土木部の委託を受けて岩手県埋蔵文化財センターが事前調査を実施することとなった。

II. 位置 地形 基本土層

位置（図1） 宮野目十三塚は東北本線花巻駅より北北東へ直線で約3.7km、二枚橋駅からは南方へ直線で約2.3kmの地点で、花巻空港用地の南端に位置し、以前は宮野目小学校の校庭であった。

5万分の1の地形図においては「花巻」に、又、2万5千分の1の地形図においては「石鳥谷」に位置している。

本地点の経、緯度は、北緯39°25′09″ 東経141°08′06″である。

調査対象範囲は、平面直角座標第10系の X - 64,360m ~ 64,490m Y + 25,940 ~ 26,000m の範囲の中にある。

高さは、調査対象地表面で標高約91.5~92.5mの範囲にある。

調査は、東西30m南北160mの範囲を対象として計画され、実施された。

地形 (図2) 奥羽山地を源流とする豊沢川、瀬川、葛丸川などの河川は、東流して北上川に合流している。これらの河川によって砂礫が堆積し扇状地が発達したと考えられている。北上川右岸のこの扇状地性の台地は少くとも新旧3段以上に分類でき、特に下位段丘がほとんどの面積を占めている。

下位段丘崖の東1~3kmには北上川が大きく湾曲蛇行し、その流域には標高76~79m程度の沖積面を形成し、段丘面との接触面には後背湿地帯の分布と河川の氾濫に伴う自然堤防の分布が見られる。

本調査地点はこの下位段丘(二枚橋段丘)の段丘崖上(標高91.5~92.5m)に位置している。又、扇状地性の台地の扇端部と扇側部の交点附近にあるため、東に北上川低地、南に瀬川低地が開け、きわめて展望が良い。

旧地形は、宮野目小学校、宮野目中学校、花巻空港、さらに民家や工場が建ちならび、原形をとどめていないが、南西と北側に小沢があって、ちょうどこれらの小沢と段丘崖にかこまれた、やや高くなった所に十三塚が作られている。

基本土層 調査地区における基本土層は次のとおりである。なお、第Ⅰ層の表土層は調査地区の南側では切土造成による整地がおこなわれているため存在しない。

第Ⅰ層 表土層 暗褐~黒褐色 有機質の砂質シルト

第Ⅱ層 段丘堆積層 明褐~黄橙色 山火灰質の粘性土

第Ⅲ層 段丘砂礫層 茶褐色 礫径10~30mm程度の円礫~垂円礫が主体で、礫間を砂及びシルトが充填している。

第Ⅱ層は層の上層において明褐色であるが、下層の黄橙色へと徐々に変化する。

北上山系開発地域土地分類基本調査「花巻」 岩手県 昭和51年



図1 位置図

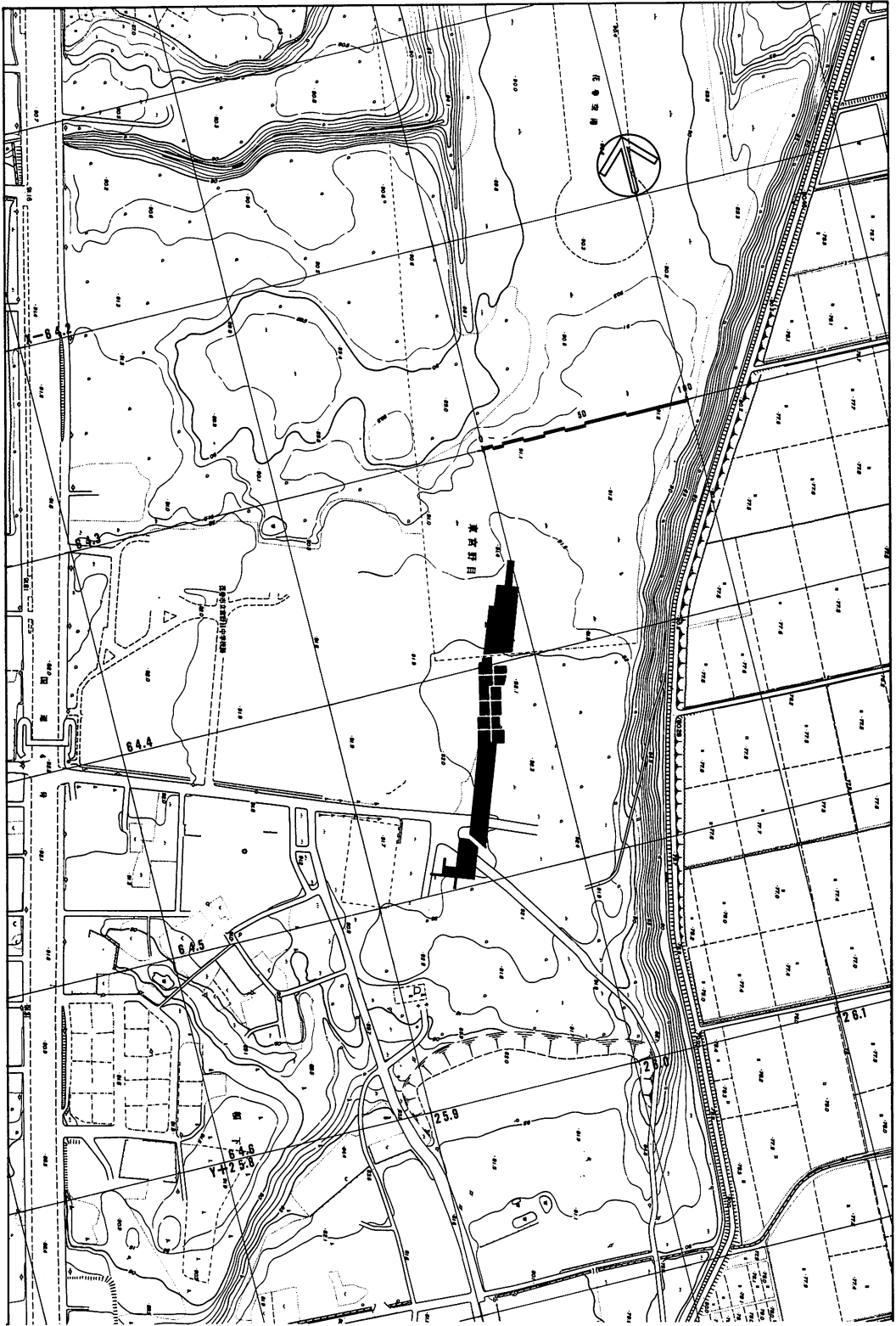


图2 地形图

Ⅲ 調査方法

調査は3基のマウンドが残っている中央地区から始め、これらの塚に周溝が検出された場合は調査地区をさらに北と南に拡張することとした。

基準方向 十三塚はほぼ直線で並ぶものと推定されるが、現在のところその直線の方向や、現存するマウンドから南北各々どのくらいの長さまで続くのか予測がつかなかった。そこで、とりあえず、3基のマウンドの位置で基準方向を設定しておき、その後都合が悪くなったら変更することにした。

基準点と測量成果 (図3-1) 3基のマウンドは南から北へ、中央1号 中央2号 中央3号とした。中央2号のほぼ中央に設定した基準点をK-1とし、中央1号のほぼ中央に設定した基準点をK-2とした。このK-1とK-2を通る直線上で中央3号のほぼ中央附近に基準点K-3を設定した。

3点の基準点の設定によって当初の基準方向KL-1はK-2、K-1、K-3を通る直線方向となった。

K-1、K-2の測量は東日本測量設計株式会社に委託し、次の成果を得た。

K-1	X-64415.941m	K-2	X-64429,409m
	Y+25974,437m		Y+25971,493m
	H 93,635m		H 93,531m
			K-1の方向角 12°19'47"

この測量成果によって基準方向KL-1の方向角は12°19'47"となった。

中央地区の調査 発掘は中央1号から始め、中央2号、中央3号と進めた。調査は各塚の基準点を中心に4分法でおこなった。中央3号については、塚の中心位置が当初の推定位置では都合が悪いことがわかったので東へ2m移動させ修正した。

発掘の結果中央1号、中央2号、中央3号共周溝が検出された。このため、中央地区の南北両方向に調査区域を設定し周溝の検出確認をすることになった。

基準方向の変更 発掘の結果中央1号、中央2号、中央3号の位置が明確になったので、基準方向KL-1との比較をしたところ今後南北両方向に基準線をそのまま延長するにはズレが多すぎるということがわかった。そこで、3基の塚の中心位置を参考にして、KL-1に対してさらに7°12'20"追加し、方向角19°32'07"の方向を変更基準方向KL-2とした。

今後は南北両方向に調査地区が拡張され、全体の距離がかなり長くなると思われるので、基

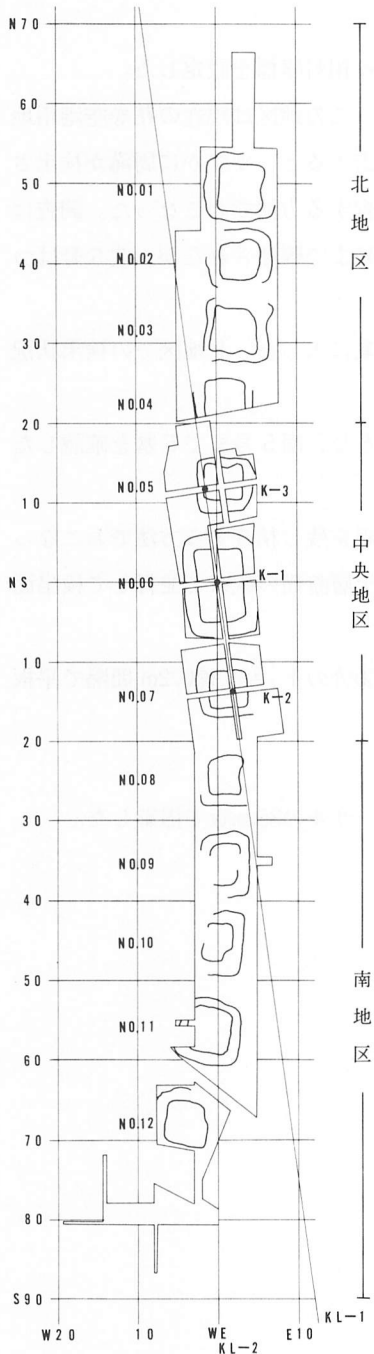


图3-1 地区割図



图3-2 遺跡全景(真上から)

準点K-1を座標原点とし、KL-2の方向をX座標軸とする相対座標を設定した。

北地区の調査 周溝による塚の検出は、北地区より始めた。この地区は現在の花巻空港用地内であるため、フェンスを越えての作業となった。表土を除去すると、かすかに周溝が検出された。発掘は周溝の輪郭を検出し、周溝は各辺に畔を残し精査する方法でおこなった。調査は北地区の南の方から進め、検出された順番に北1号から北4号まで確認されたが、北5号はついに確認できなかった。

南地区の調査 北地区の後半から南地区においても検出作業に入った。北地区での検出状況からして南地区での基準方向の変更は必要ないと考えられた。

南地区は北側から進め、検出された順番に南1号、南2号とし、南5号まで5基を確認したが、南6号はついに確認することができなかった。

調査は北地区同様に、周溝の輪郭を検出し、周溝は各辺に畔を残し精査する方法でおこなったが、特に地区の南部分は表土が荒れて攪乱されているため土層断面の観察と並行して検出面の観察をおこなった。

調査の記録 中央1号、中央2号、中央3号の現況は縮尺50分の1、等高線0.2m間隔で平板実測によって測量した。

遺構の実測は平面、断面共縮尺20分の1でおこなった。

写真はモノクロームが6×7版と35mm版で、カラーはリバーサルの35mm版で撮影した。

Ⅳ．遺 構

現在の花巻空港用地内を北地区（図6）とした。用地内の自然地形は全部整地された上で、約0.1～0.3mほどの盛土がされ、草地となっていた。旧地形は周溝の検出された部分が、かすかに高く南の方向にわずかずつ高さを高めている。東方向と西方向にはわずかずつ低くなるが、北方向には沢へと傾斜を少し強めている。

表土発掘は北地区の南側から始め、周溝を検出しながら北の方向へと進み、北1号、北2号、北3号、北4号と検出されたが、北5号は検出することができなかった。

積土の現存する3基の塚がある地区を中央地区（図8）とした。地区の東側は砂利採取のため切り土されて、10m以上の崖になっている。塚の東ぎわに宮野目小学校当時の排水用と思われる溝の残痕や、コンクリートの足洗場などが見られる。西側は宮野目中学校の校庭側であるが、校庭造成のため少し低くなっている。

調査の対象となる塚部分は、校庭整地においても常々現状保存が計られたものと見えて、周囲より、わずかに高くなっている。塚とその周辺には笹竹が密生し、ゴミや土砂の捨場となっていた。

塚の発掘は南側の中央1号から始め、中央2号、中央3号と進めた。

中央地区に続く南の地区を南地区（図10）とした。ここは北地区や中央地区同様、以前は宮野目小学校の校庭の一部であったばかりでなく、校舎正面入口の前面に位置しているため、以前より整地等の多い地区であった。このために、溝や穴などによる攪乱が多かった。

地区の東側は中央地区同様砂利採取のため10m以上の崖になっている。地区全体は、一面に整地されている他、地区の南側には排水溝が掘られ、砂利採取のときにトラックの通路としたため、厚く砂利舗装されていた。

発掘は北側から進め、北1号、北2号、北3号、北4号、北5号と検出したが、北6号は検出することができなかった。

全地区を通して検出された遺構は、積土の現存する塚が3基、周溝だけが検出されて塚が9基、計12基であった。13の塚であるためには1基不足している。

北の方から、順次通し番号を付した。各塚の状況は次のとおりである。



図4-1 遺跡全景(北から)

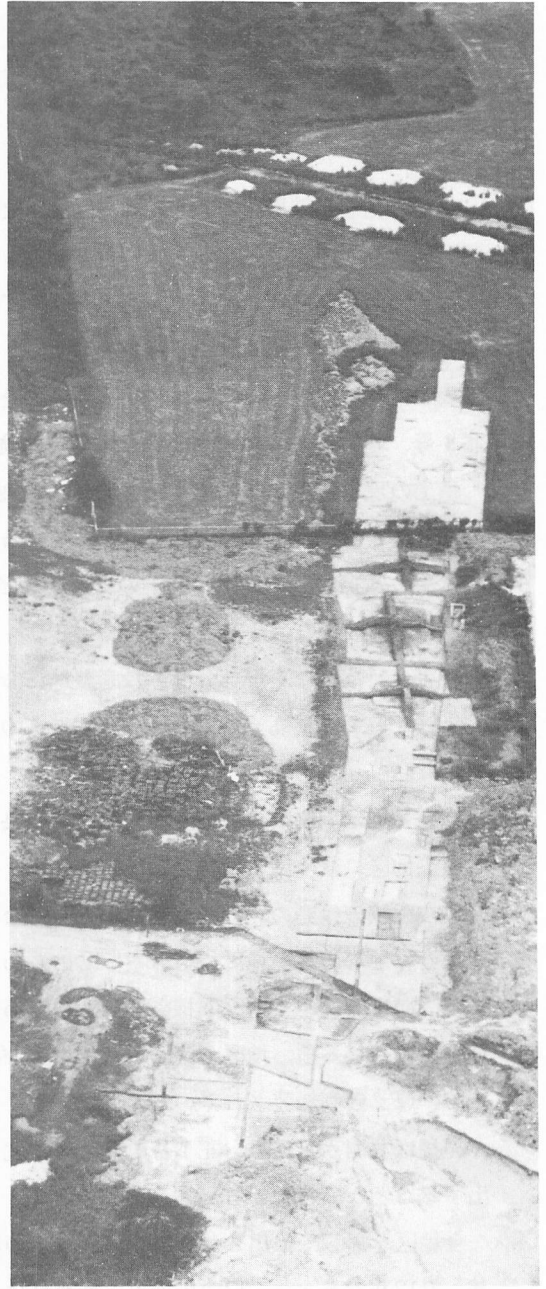


図4-2 遺跡全景(南から)



図5-1 遺跡全景(南西から)

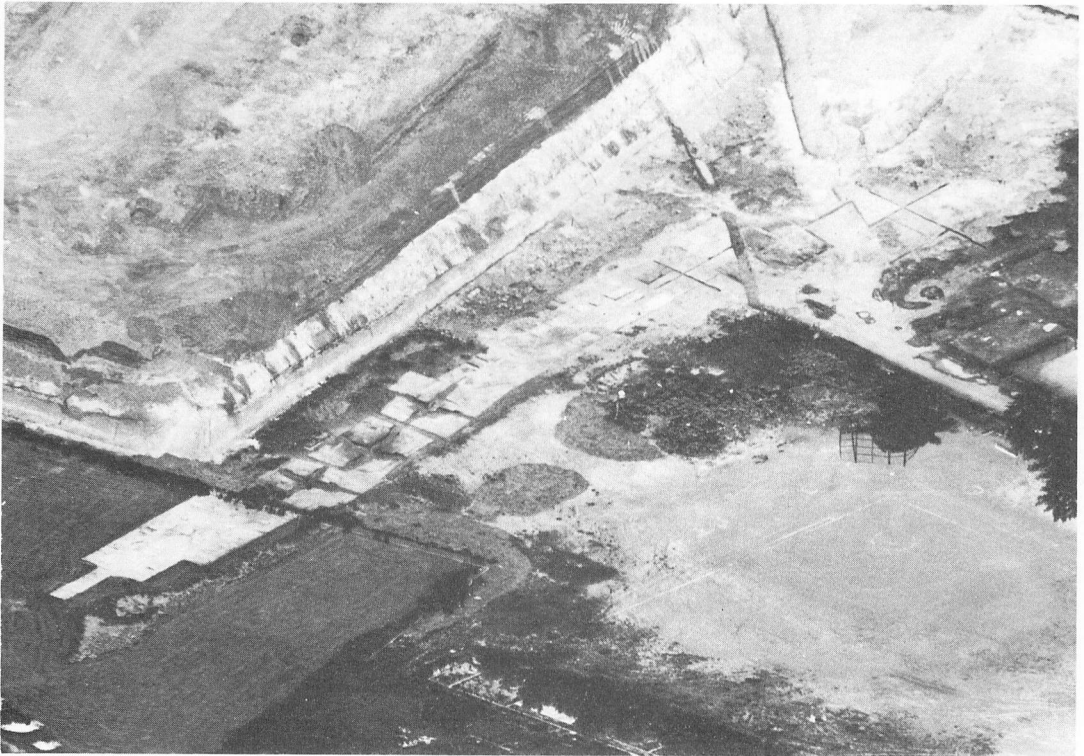


図5-2 遺跡全景(北西から)

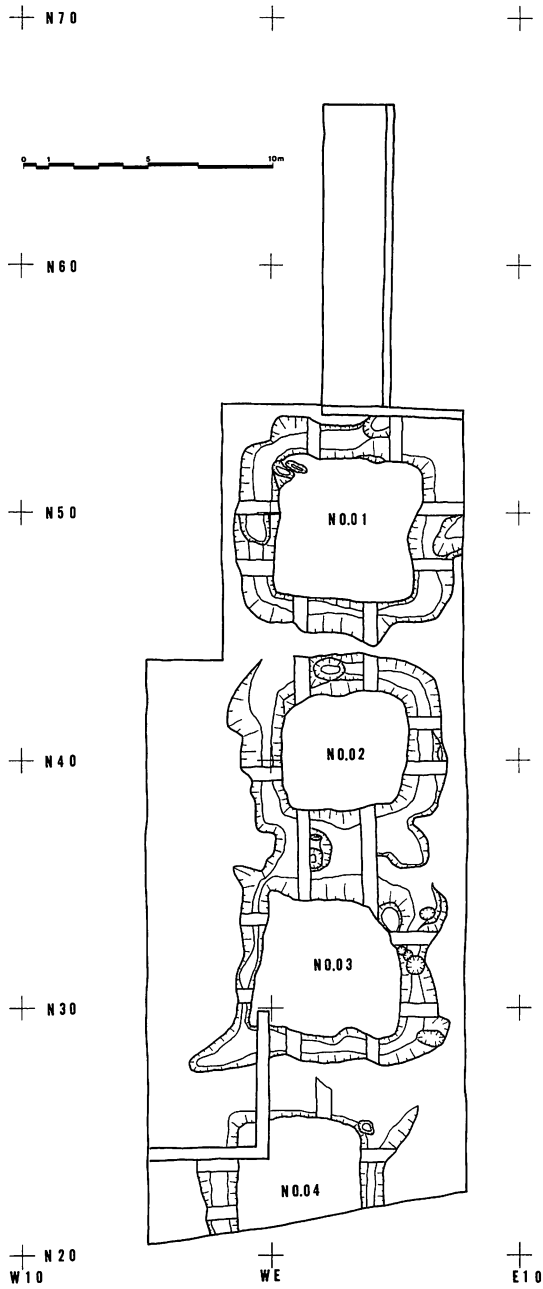


图6 北地区全体图



図7-1 北地区全景(北から)



図7-2 北地区全景雨天後(北から)

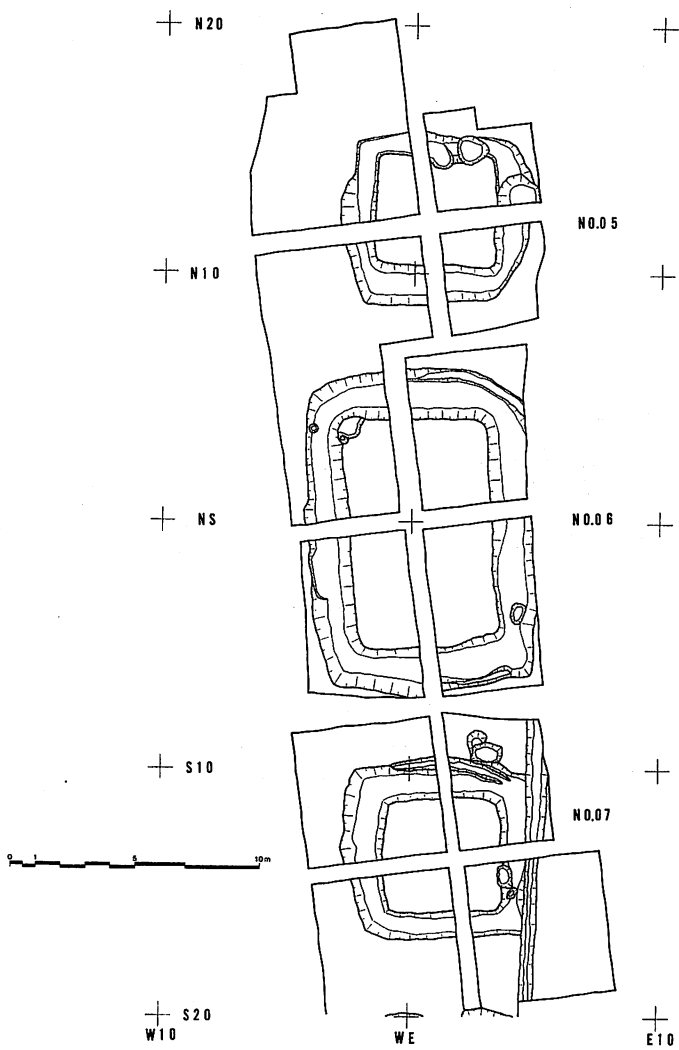


图8 中央地区全体图



図9-1 中央地区調査前(南東から)



図9-2 中央地区調査中(南から)

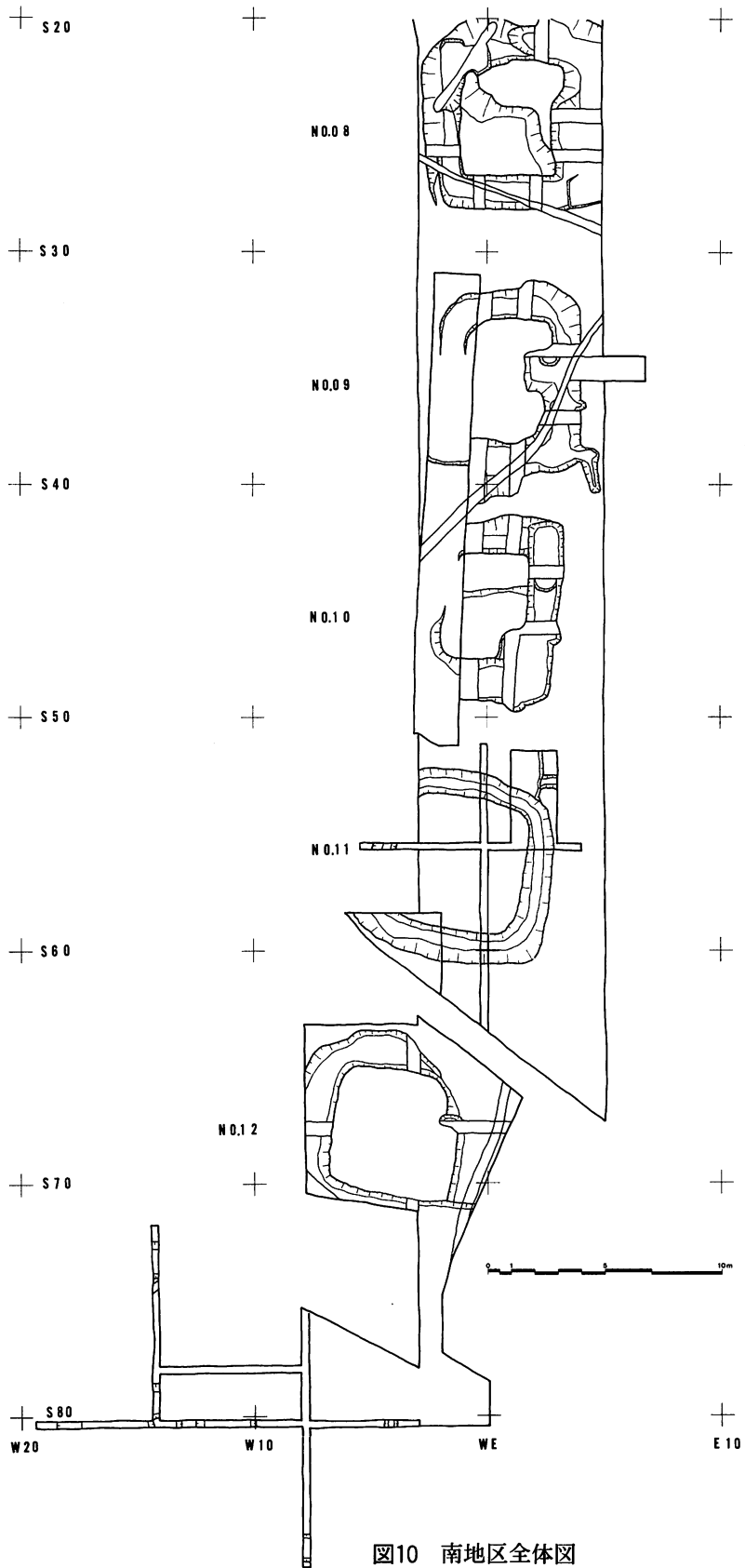


图10 南地区全体图



図11-1 南地区全景(南から)



図11-2 南地区全景(南から)

1. 1号塚 (北4号)

現況は草地で、表土は約0.3mほどの盛土による整地層があった。

遺構は表土下の第Ⅱ層上面で検出される。塚部分の盛土はすでになく、地山切り出し部分が検出されたのである。

塚の平面規模は、東西方向で5.6m、南北方向で5.6mの隅丸方形である。北西部分に浅い穴があり攪乱されている。

周溝は巾が1.1~1.6mに、深さは検出面から0.06~0.18mほどで、わずかに溝の底部が残されていた。溝の北部、東部、西部に各々穴などがあり攪乱されているため、北東部から東部にかけては溝の外側法面が検出できなかった。

塚全体の向きは、基準方向に対して、約4°東に傾いている。

出土遺物はない。

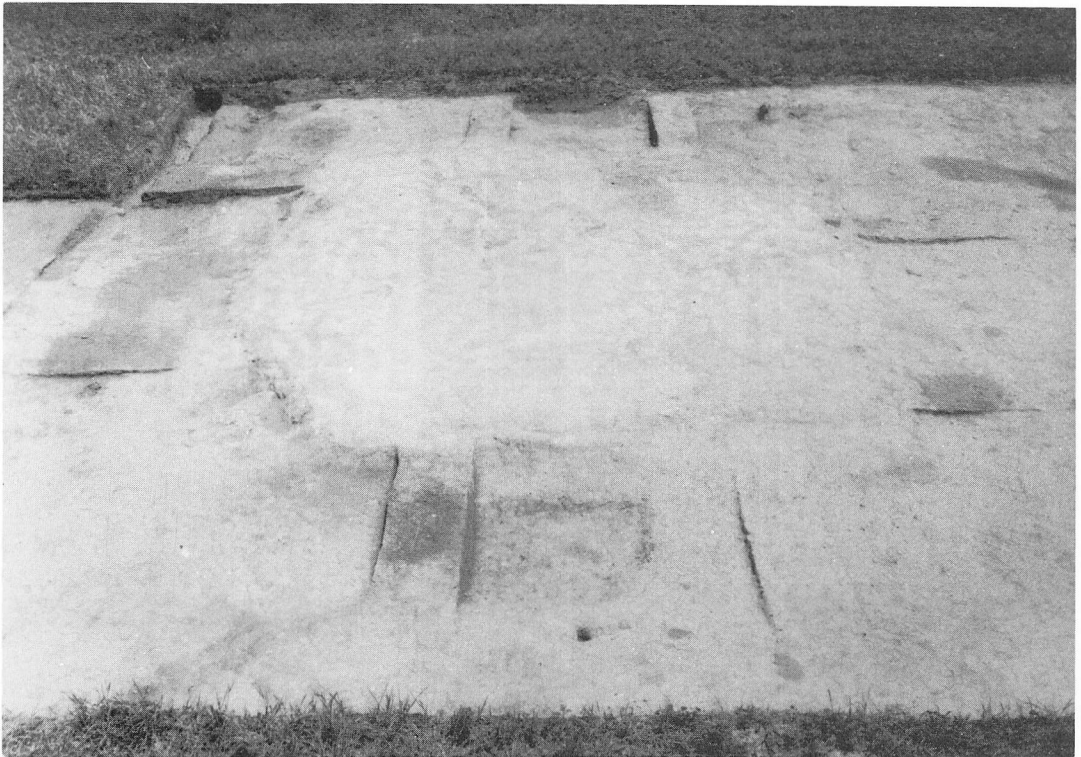


図12 1号全景(西から)

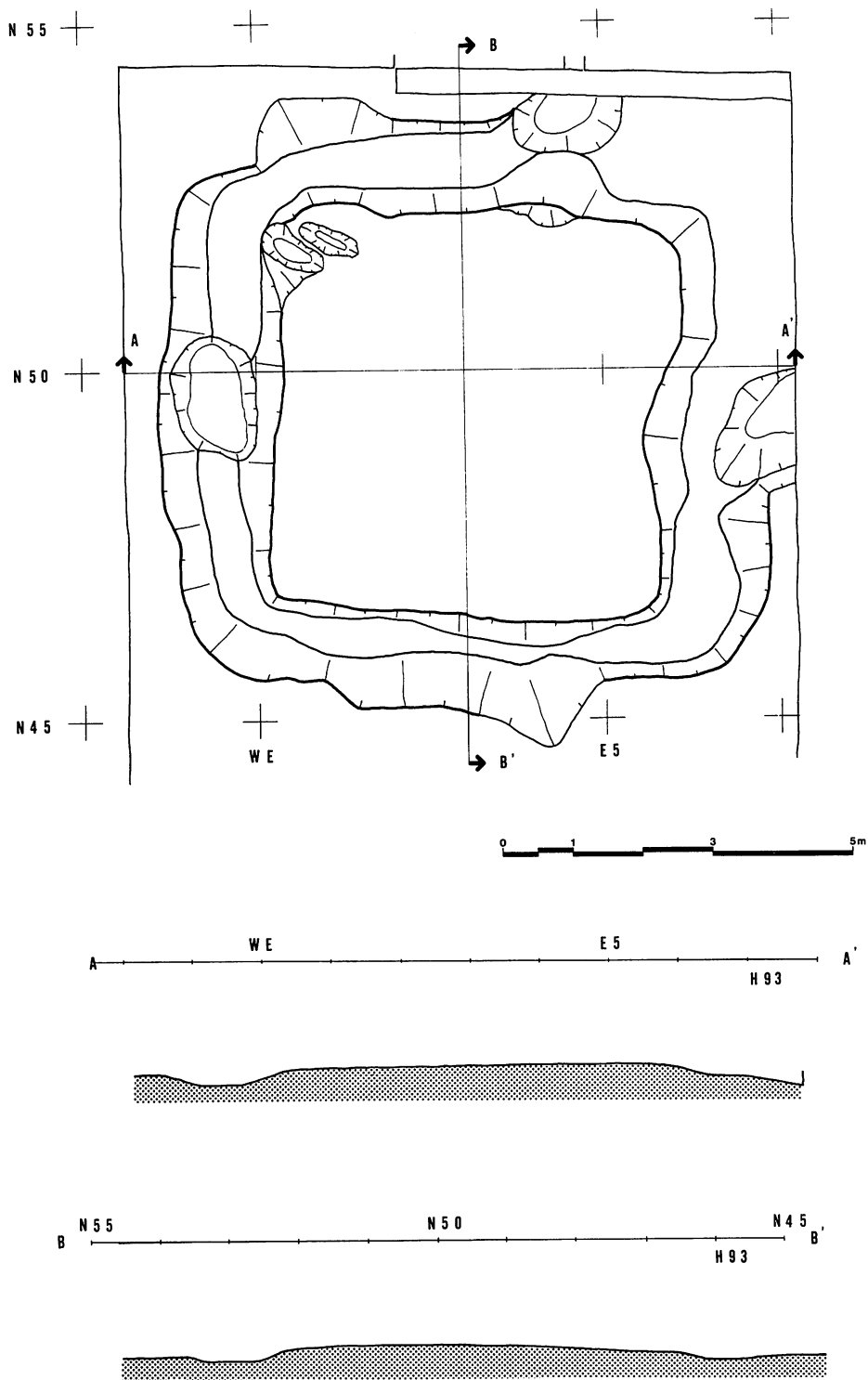


图13 1号平面、断面图

2. 2号塚 (北3号)

現況は草地で、表土は約0.3mほどの盛土による整地層であった。

遺構は表土下の第Ⅱ層上面で検出される。塚の盛土部分はすでになく、地山切り出し部分が検出されている。

塚の平面規模は、東西方向で5.1m、南北方向で4.8mと、隅丸の少し横に長い方形であるが、本来は5.1mほどの方形であったと推定される。

周溝は、1.2~1.5mの間があって、検出面より0.03~0.02mと浅く、かすかに溝の底部を検出した。溝の北側や南側に穴などがあって攪乱が見られ、北部の一部や南部では溝の外側法面が検出できなかった。

塚全体の向きは基準方向と同じで傾きはない。

出土遺物はない。

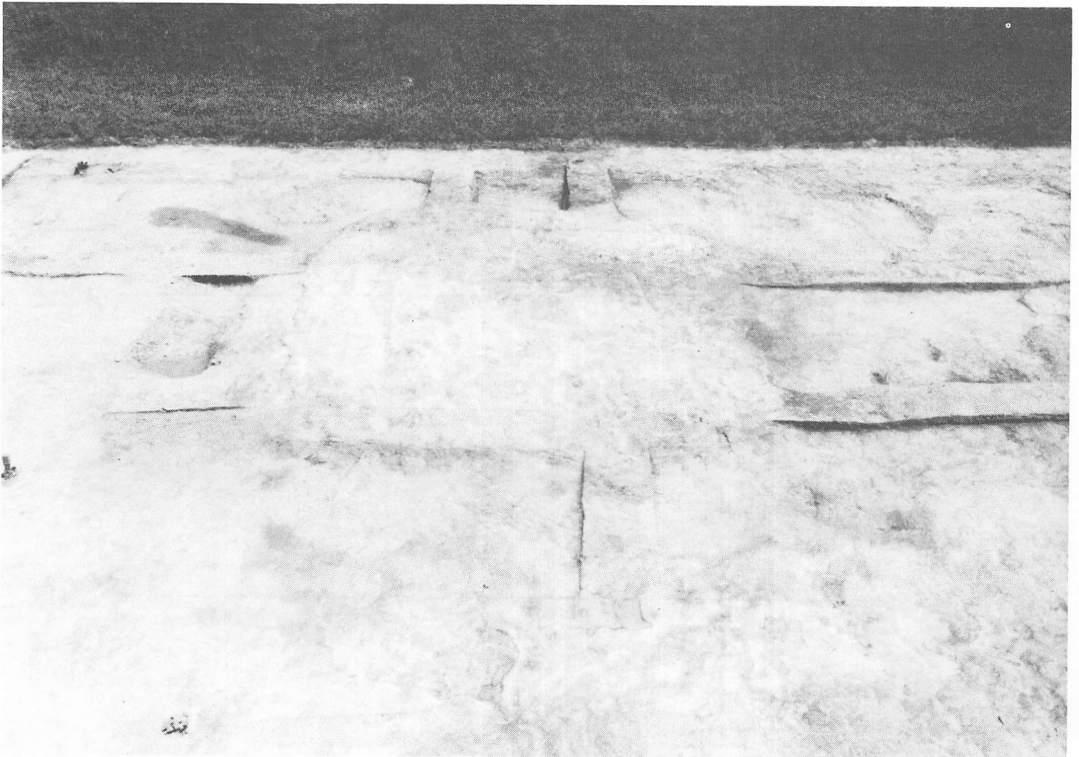


図14 2号全景(西から)

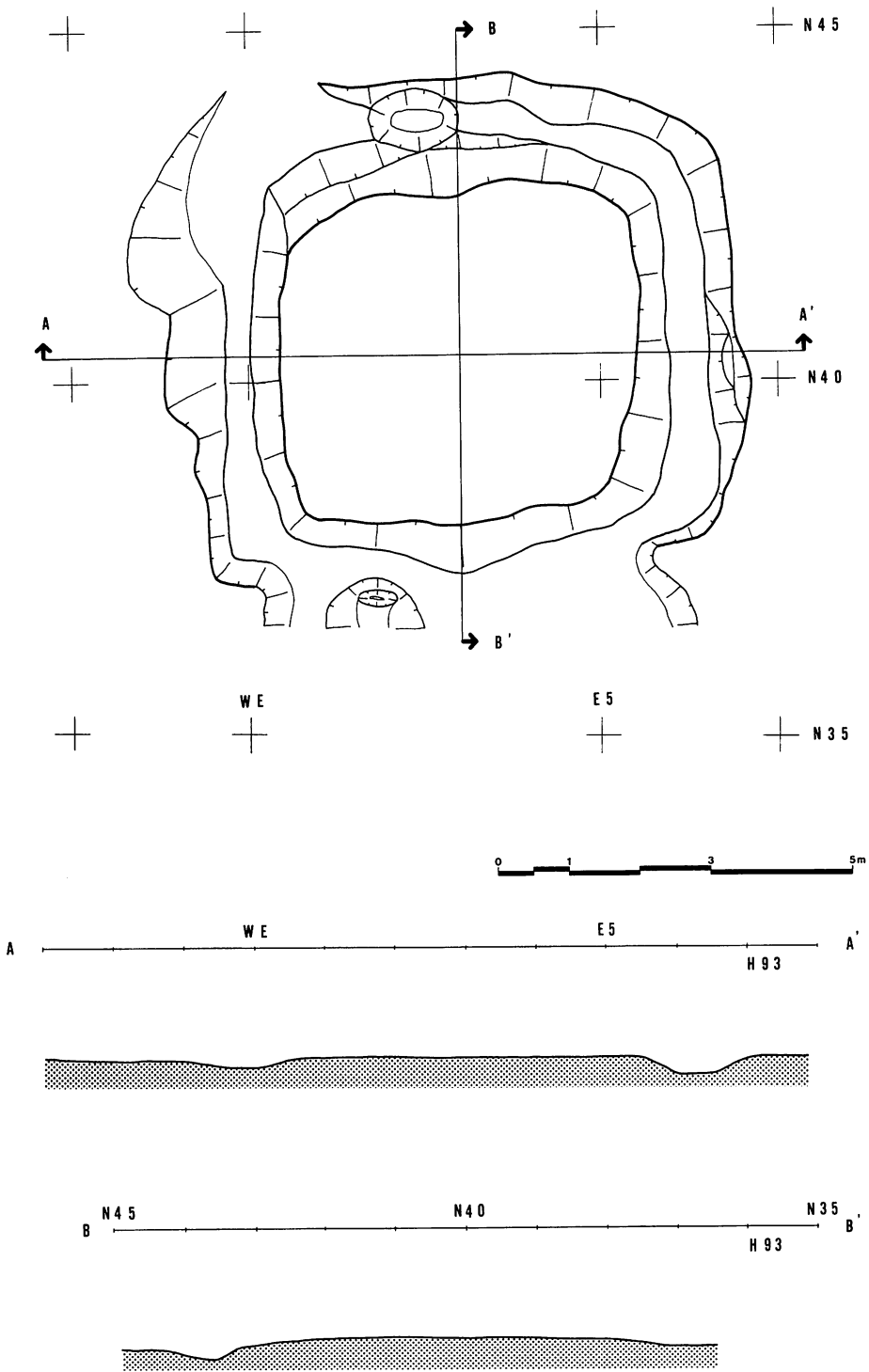


图15 2号平面、断面图

3. 3号塚 (北2号)

現況は草地で、表土は約0.2mほどの盛土による整地層であった。

遺構は表土下の第Ⅱ層上面で検出される。塚の盛土部分はずでなく、地山切り出し部分が検出されている。

塚の平面規模は東西方向で5.7m、南北方向で5.7mの隅丸方形である。北東部分に穴があつて攪乱されている。

周構は、巾が0.5~1.5mで、深さが検出面より0.04~0.1mと浅く、溝の底部をわずかに検出している。溝の東部、南東部、南西部、北西部などには穴があり攪乱をうけているため形がくずれている。北部の溝の外側法面は検出されていない。

塚全体の向きは基準方向に対して約5°東に傾いている。
出土遺物はない。

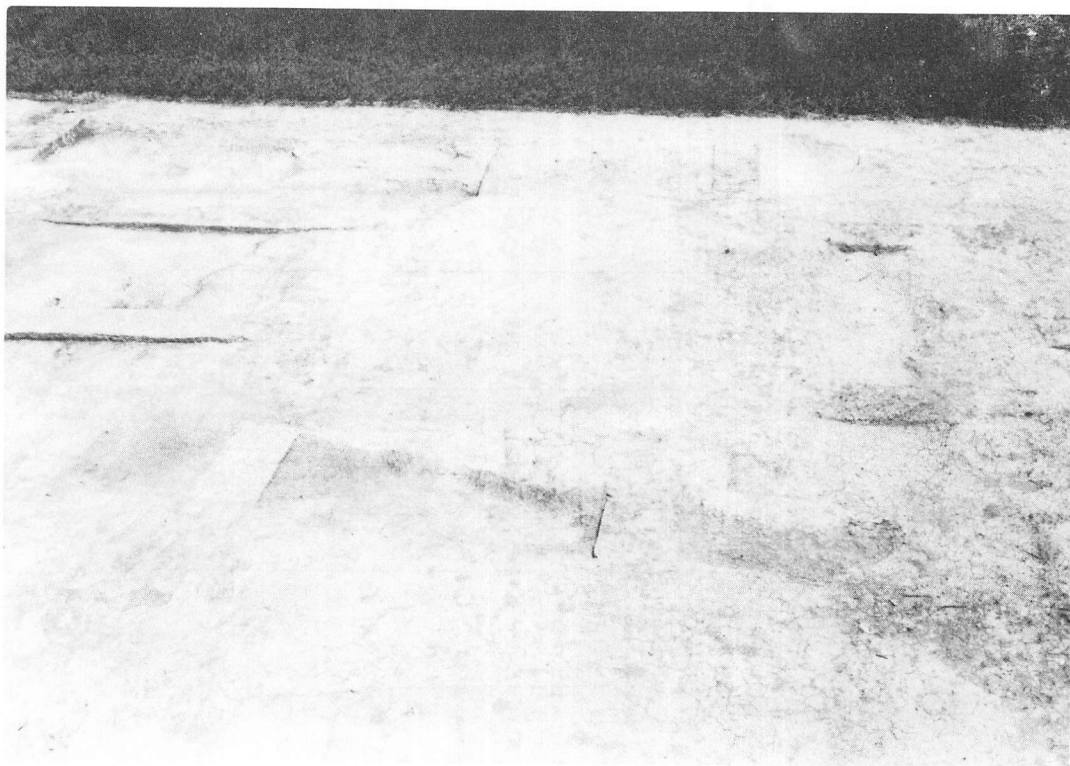


図16 3号全景(西から)

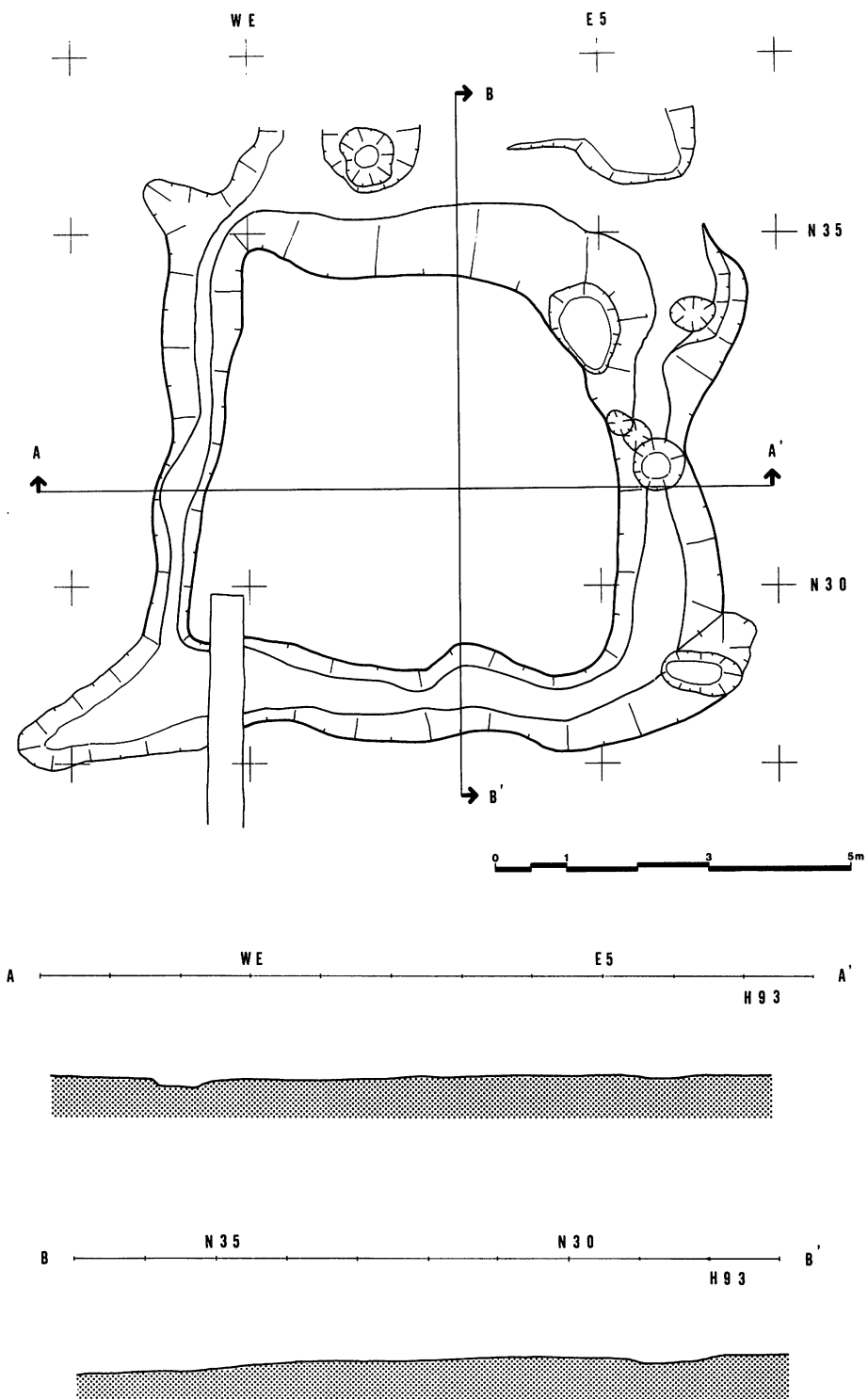


图17 3号平面、断面图

4. 4号塚 (北1号)

現況は草地で、表土は約0.1mほどの盛土による整地層であった。

遺構は表土下の第Ⅱ層上面で検出される。塚の盛土部分はすでになく、地山切り出し部分が検出されている。

塚の南部は空港用地境のフェンスの下に入っていて、発掘することができなかった。

塚の平面規模は東西方向で5mであった。南北方向もほぼ同じと推定されるので、1辺5mほどの隅丸方形となるであろう。

周溝は巾が0.9~1.6m 深さは0.04~0.1m ほどで、溝の底部をわずかに検出している。北西部、北部、北東部では溝の外側法面が検出されていない。

塚全体の向きは基準方向と同じで傾きはない。

出土遺物はない。

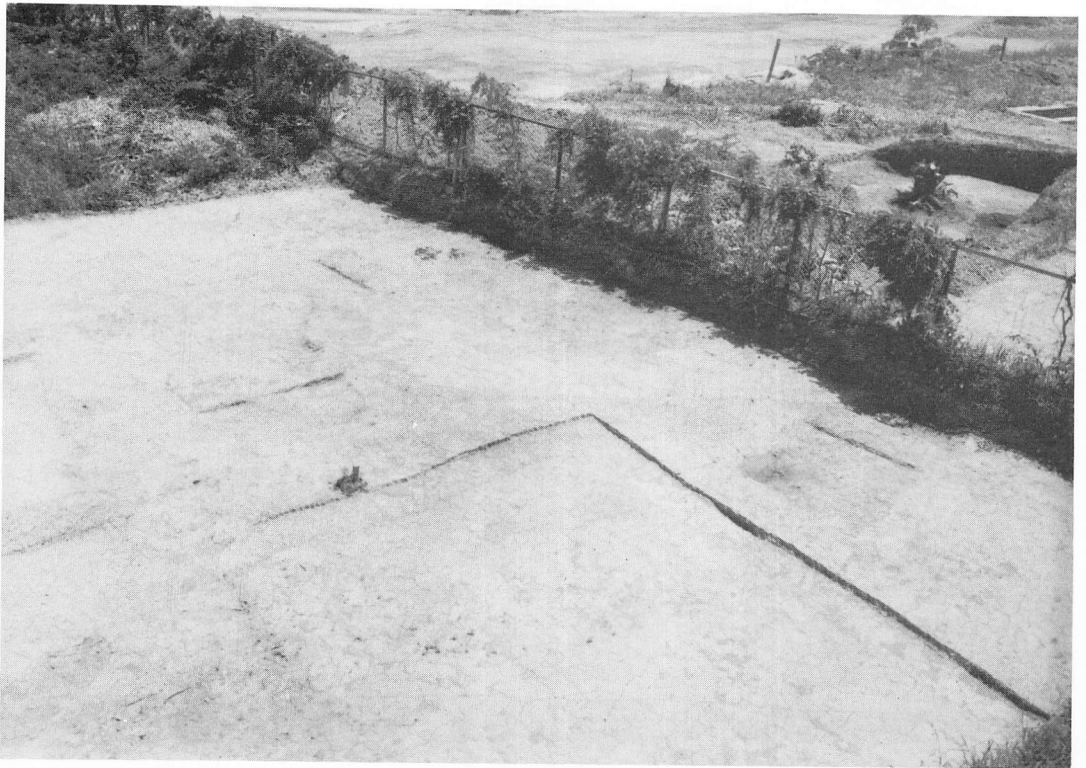


図18 4号全景(西から)

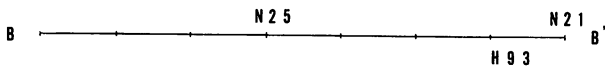
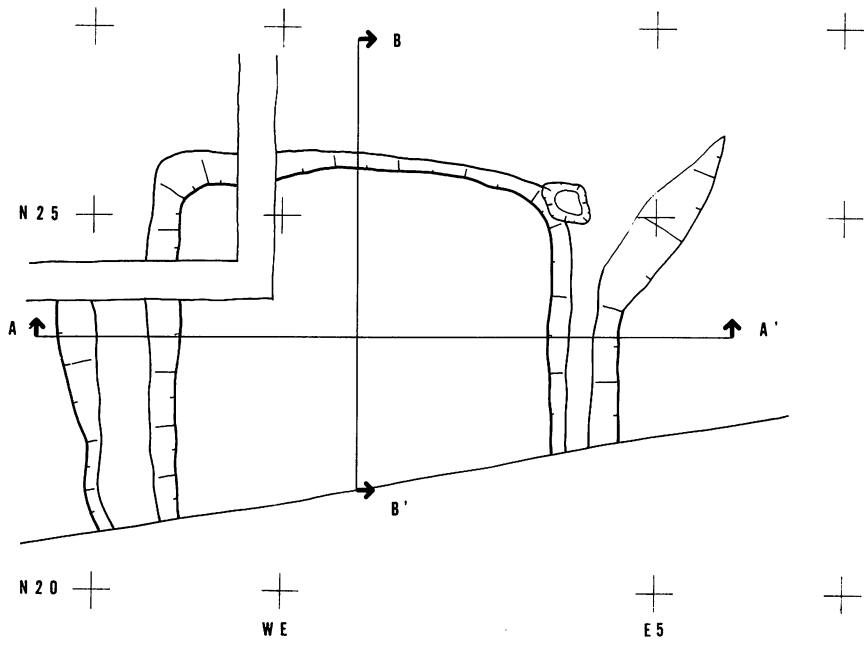


图19 4号平面、断面图

5. 5号塚 (中央3号)

周囲との比高が約0.8mほどのマウンドがある。本来の積土部分が現存していると思われるが、土砂が山盛りに捨てられているために、どこが本体部分なのか見分けがつかなくなっている。塚とその周辺には笹竹が密生し、塚の上には桜の切り株が残されてあった。さらに塚の東側には排水溝の残痕がある。

塚の平面規模は東西方向で4.8m 南北方向で4.5mで隅丸のほぼ方形である。

周溝は巾が0.7～1.7mで検出され、深さは検出面から0.15～0.3mであった。北部、東部に穴があって攪乱をうけている。全体として北半分の保存状況が悪い。

塚の積土は後世の攪乱をうけて保存状況はあまり良いとはいえない。塚の現状は新たに積み上げられた土によって形作られている。これらの土にはガラスや瓦片などが含まれているので、宮野目小学校開設後のものである。

本来の積土は旧表土の上に、まず旧表土と思われる土が積み上げられ、さらにその上に旧表土下の土が積み上げられている。このため断面には版築状の水平互層は見られない。

積土の高さをどのくらいに作ったのか不明であるが、旧表地より最高0.6mの高さが現存していた。

塚本体の積土の途中や、旧地表面、あるいは旧地表下に遺物の出土や、遺物等の埋設を目的とした施設の痕跡は認められなかった。

塚全体の向きは基準方向と同じで傾きはない。

出土遺物は十銭銅貨(R-7)が1枚、周溝埋土上面より出土している。



図20-1 5号現況(南西から)

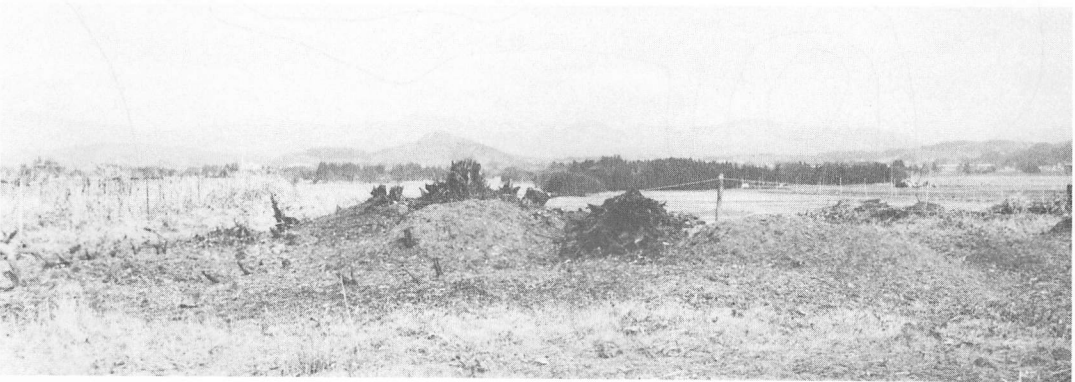


図20-2 5号現況(西から)

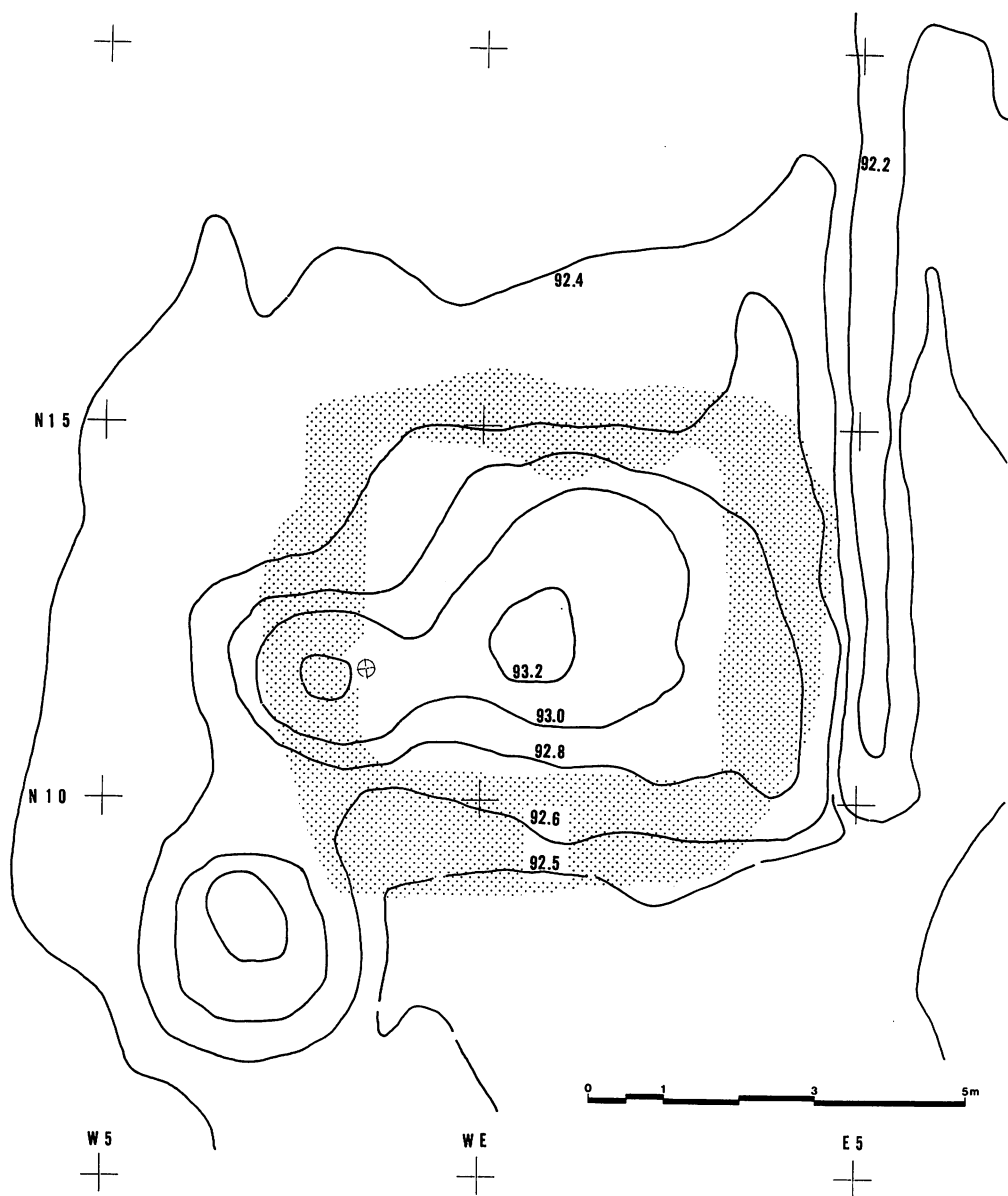


図21 5号現況図

〔土層注記〕

- | | | |
|---|--|-------------------|
| 1 | 橙色土(7.5Y R $\frac{1}{6}$) | } ガラス、瓦片、ビニールを含む。 |
| 2 | 灰褐色土(7.5Y R $\frac{5}{6}$) | |
| 3 | 明褐灰色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$) | |
| 4 | | |
| 5 | 明褐色土(7.5Y R $\frac{5}{6}$)に黄橙色土(7.5Y R $\frac{1}{6}$)が少し混じる。 | |
| 6 | 暗褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)に明褐色土(7.5Y R $\frac{5}{6}$)が少し混じる。 | |
| 7 | 暗褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$) | 旧表土 |

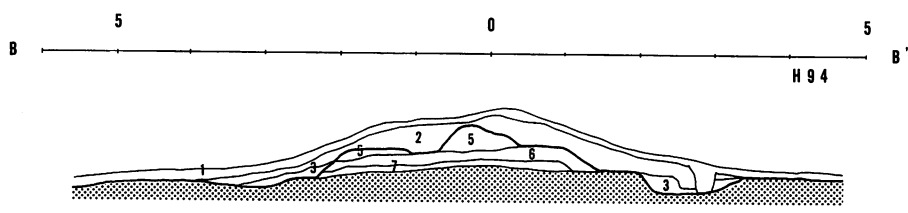
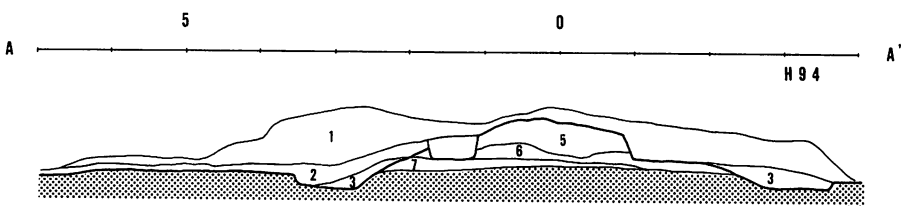
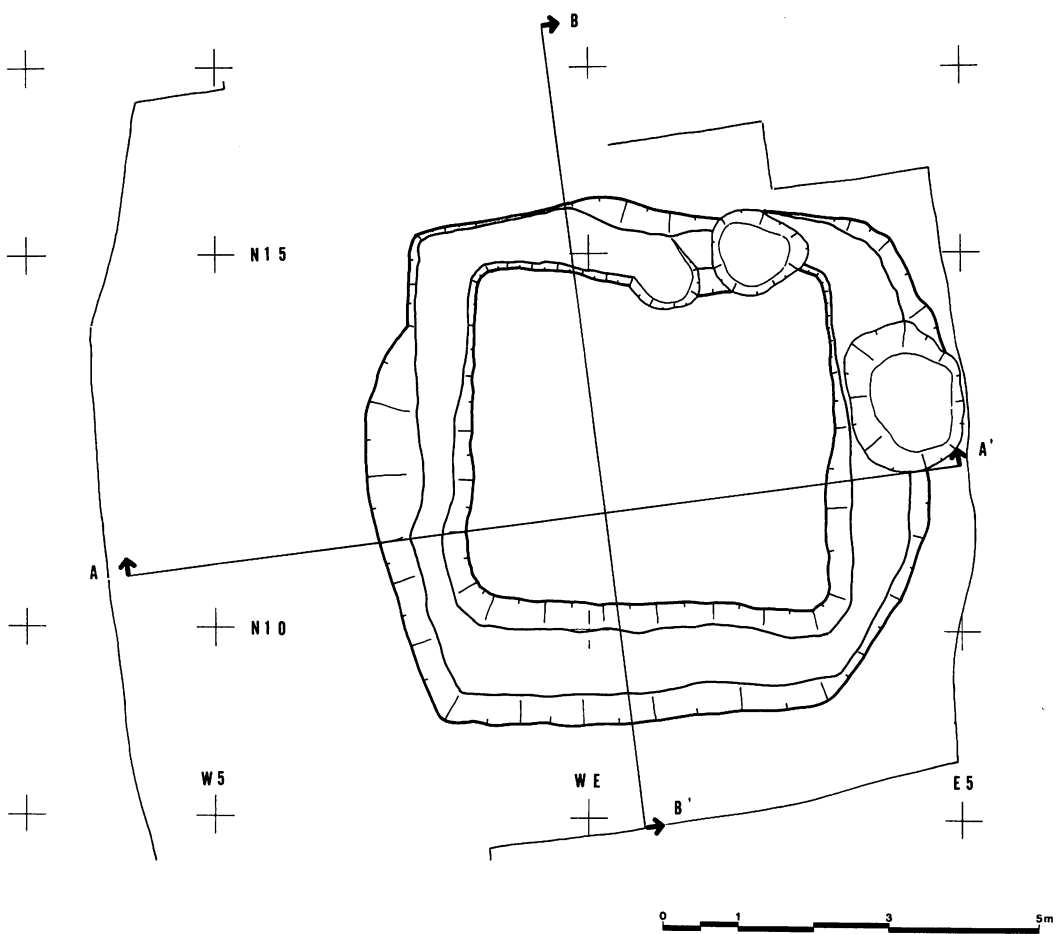


图22 5号平面、断面图



図23-1 5号全景(西から)



図23-2 5号A-A'断面(南から)



図23-3 5号B-B'断面(西から)

6. 6号塚 (中央2号)

周囲との比高が約1mほどのマウンドが現存している。現存するマウンドの中では一番大きくて高い。

やはり、土砂やゴミが捨てられていて、塚とその周囲には笹竹が密生し、塚の上には松の切り株が残されてあった。さらに、東側にはコンクリートで作られた足洗場が残されてある。

塚の平面規模は東西方向で5.8m、南北方向で9.2mの隅丸の縦に長い長方形をしている。他の塚に比較して一段と大型である。

周溝は巾が1.4～1.8mで、深さは0.3～0.4mであった。全体として保存状況は良い。

塚の積土は、まず旧表土の上に塚本体の外側、つまり周溝側に旧表土と思われる土が積み上げられ、その上に塚全体を旧表土下の土を盛り上げている。このため断面には版築状の水平互層は見られない。

本来の積土の高さは不明であるが、旧表土より最高0.8mの高さで現存していた。

塚本体の積土の途中、および旧地表面、あるいは旧地表下に遺物などはなく、又遺物等の埋設を目的とした施設の痕跡も認められなかった。

現在塚を覆っている土にはガラスや瓦片などが含まれているので、宮野目小学校開設後のものである。

塚全体の向きは基準方向に対して約6°西に傾いている。

出土遺物は次の二点である。

小型五十銭黄銅貨 (R-5) 塚の表土上面出土

寛永通宝銅銭 (R-6) 周溝埋土上面出土

N 10
W 5

W E

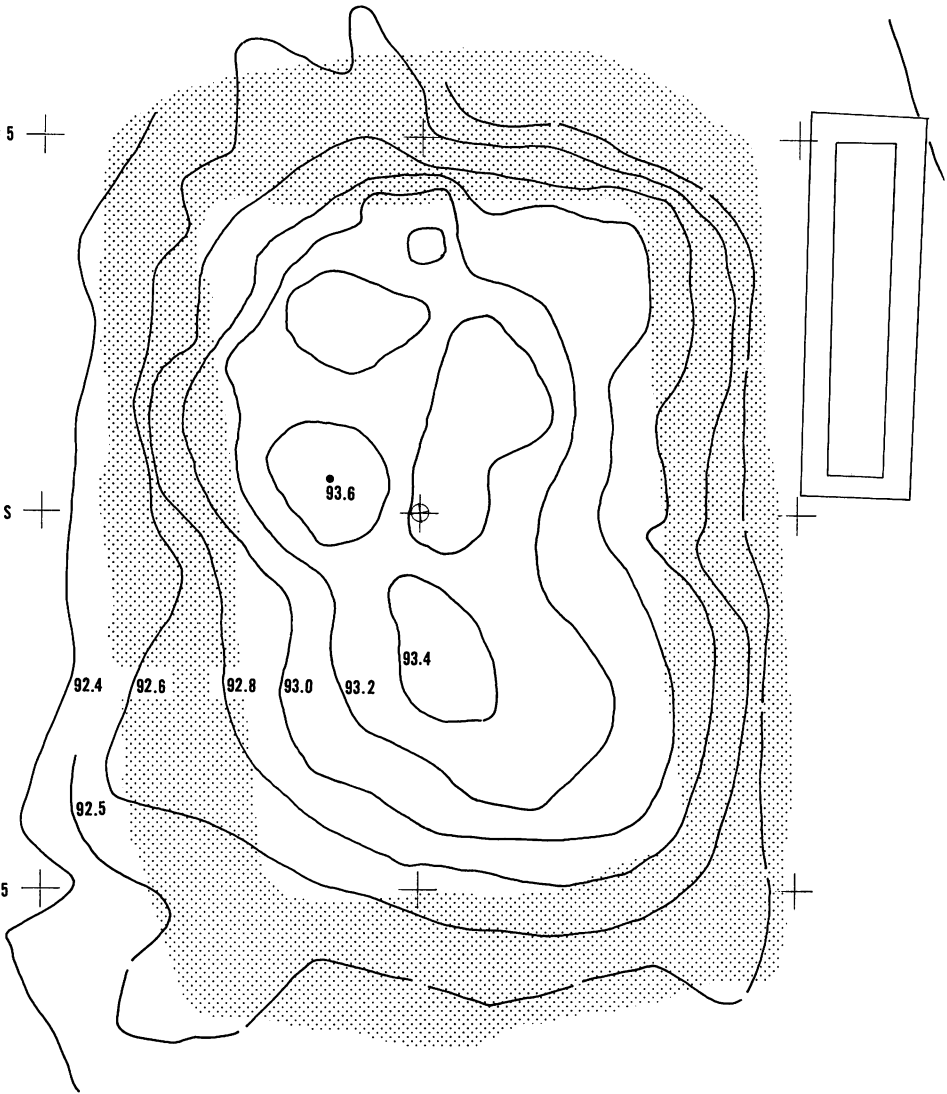
E 5

N 5

N S

S 5

S 10



0 1 3 5m

图24 6号現況図

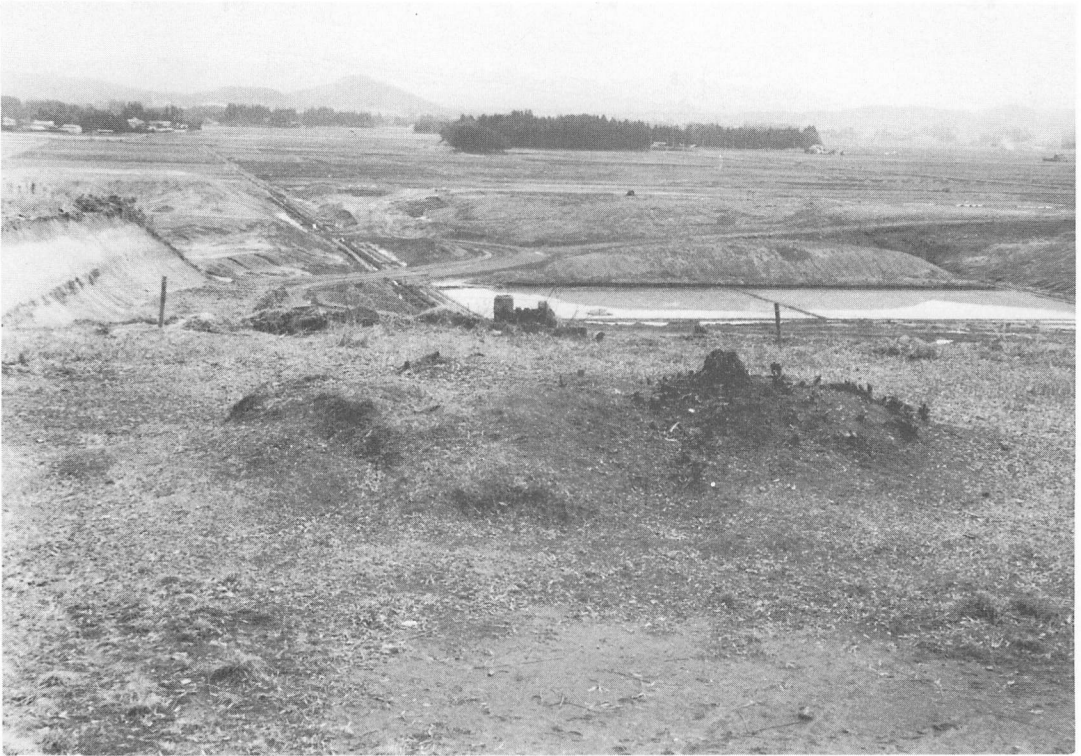


図25-1 6号現況(西から)



図25-2 6号現況(西から)

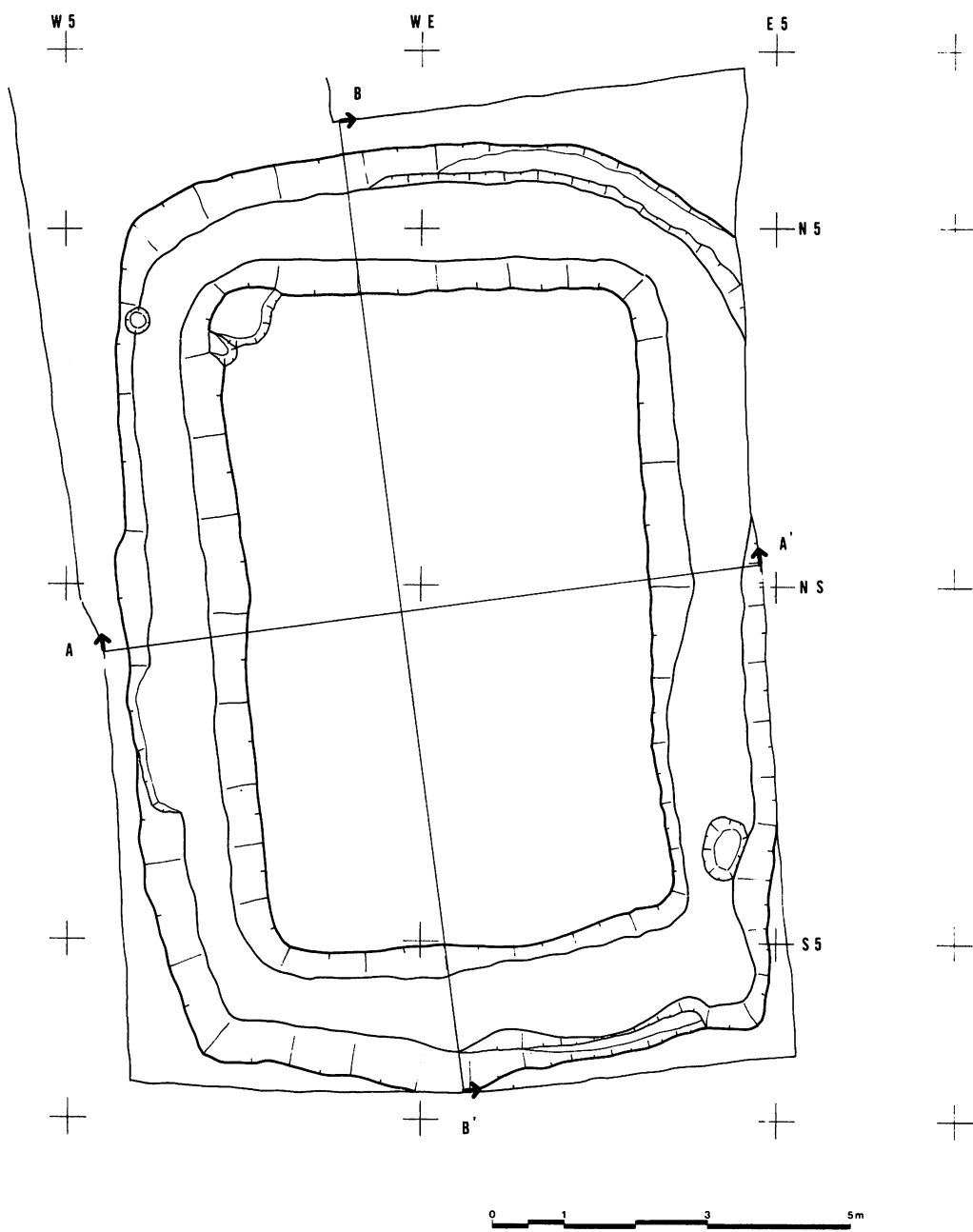
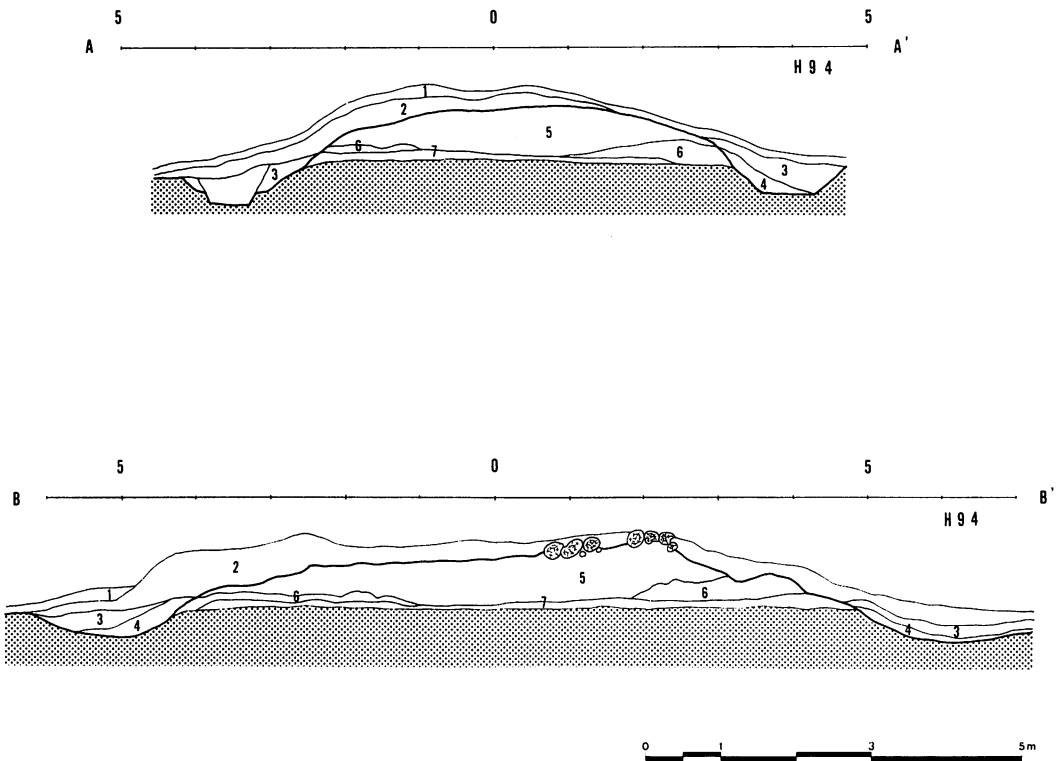


图26、6号平面图



[土層注記]

- | | | |
|---|--|-------------------|
| 1 | 橙色土(7.5Y R $\frac{7}{8}$) | } ガラス、瓦片、ビニールを含む。 |
| 2 | 灰褐色土(7.5Y R $\frac{5}{8}$) | |
| 3 | 明褐色土(7.5Y R $\frac{3}{8}$) | |
| 4 | にぶい橙色土(7.5Y R $\frac{3}{4}$) | |
| 5 | 明褐色土(7.5Y R $\frac{5}{8}$)に黄橙色土(7.5Y R $\frac{7}{8}$)が少し混じる。 | |
| 6 | 暗褐色土(7.5Y R $\frac{3}{8}$)に明褐色土(7.5Y R $\frac{5}{8}$)が少し混じる。 | |
| 7 | 暗褐色土(7.5Y R $\frac{3}{8}$) | 旧表土 |

図27 6号断面図



図28-1 6号全景(北西から)



図28-2 6号A-A'断面(南から)

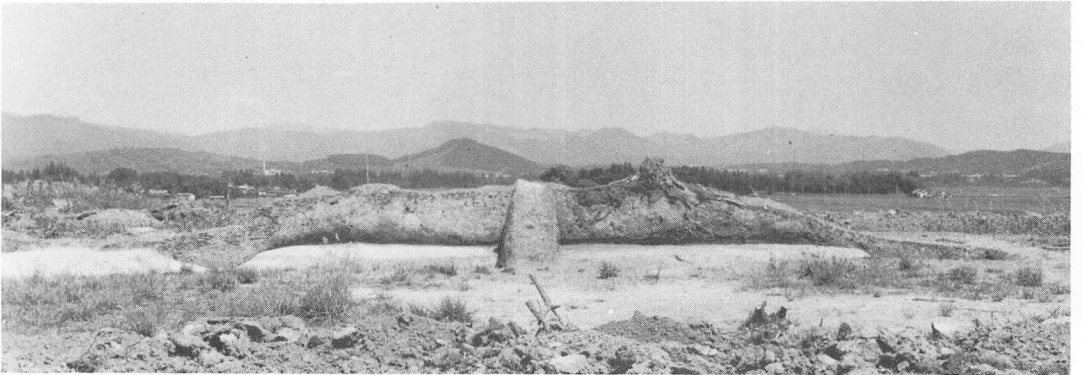


図28-3 6号B-B'断面(西から)

7. 7号塚 (中央1号)

周囲との比高0.9mほどのマウンドが現存している。

ここも5号、6号同様土砂やゴミが塚を覆っていた。塚と周囲は笹竹が密生し、塚の上には桜の木の切り株が残されてあった。塚の東側には埋まりかけた溝があり、南側には無数の穴が重複しゴミが投げこまれてあった。

塚の規模は東西方向で4.8m 南北方向で4.6mの隅丸方形をしている。

周溝は巾が1.0～1.7mあって、深さは0.18～0.25mである。全体として保存状況が良い。

この塚の積土は他の塚と異なる点がある。それは塚の本体部分に旧表土が残っていないことである。このために、この塚では旧表土下の土の上から土を積み上げられている。このために、他の塚同様、断面には版築状の水平互層は見られない。

本来の積土の高さは不明であるが、当初の積土部分が最高0.8mの高さで残っていた。

現在塚の表面を覆っている土にはガラスや瓦片などが含まれているので、宮野目小学校開設後の盛土である。

塚の中央に盗掘のためと思われる穴が底まで掘られている他は、積上の途中および、旧表土面や旧表土下に遺物などはなく、又遺物等の埋設を目的とした施設の痕跡も認められなかった。

塚全体の向きは基準方向と同じで傾きはない。

出土遺物は次の5点である。

- 桐一銭銅貨 (R-1) 塚表土上面出土
- 新寛永銅銭 (R-2) 周溝埋土上面出土
- 桐一銭銅貨 (R-3) 周溝埋土上面出土
- 新寛永銅銭 (R-4) 周溝埋土上面出土
- 小銃の弾 (R-8) 塚表土中出土

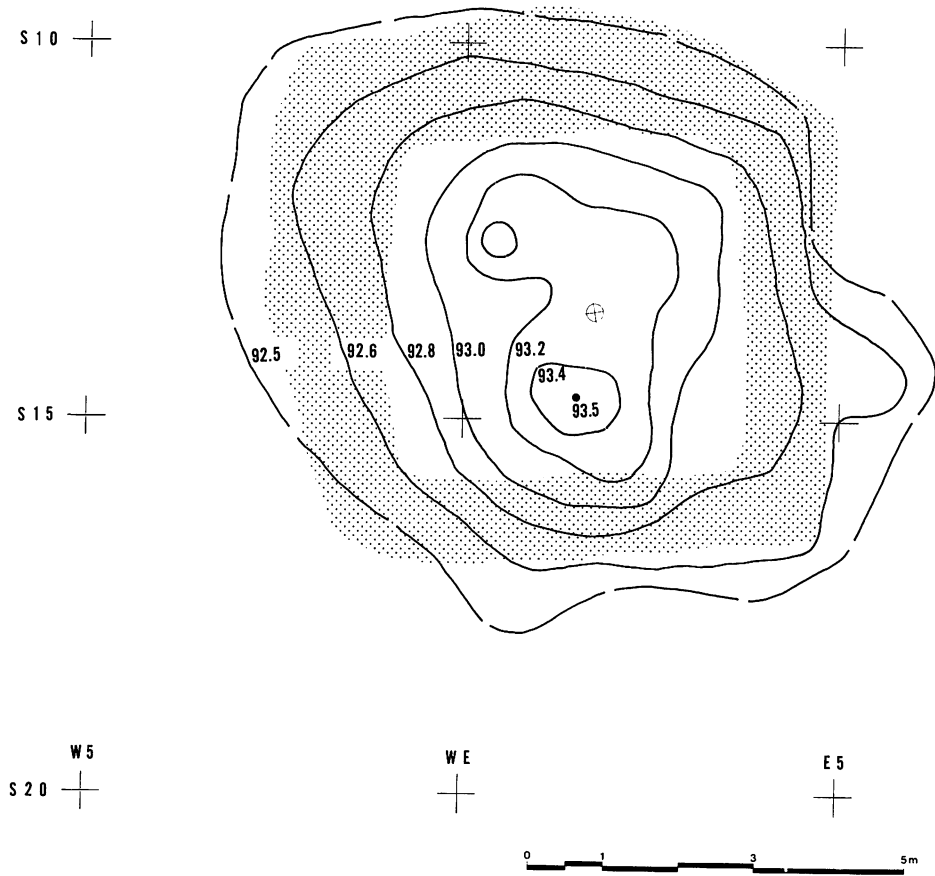


図29 7号現況図

[土層注記]

- | | | |
|---|--|-------------------|
| 1 | 橙色土(7.5Y R 7/6) | } ガラス、瓦片、ビニールを含む。 |
| 2 | 灰褐色土(7.5Y R 5/6) | |
| 3 | 明褐色土(7.5Y R 1/2) | |
| 4 | にぶい橙色土(7.5Y R 3/4) | |
| 5 | 明褐色土(7.5Y R 5/6)に黄橙色土(7.5Y R 5/6)が少し混じる。 | |
| 6 | 暗褐色土(7.5Y R 3/6)に明褐色土(7.5Y R 5/6)が少し混じる。 | |

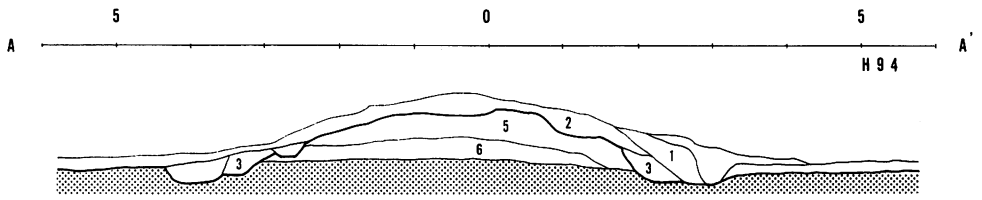
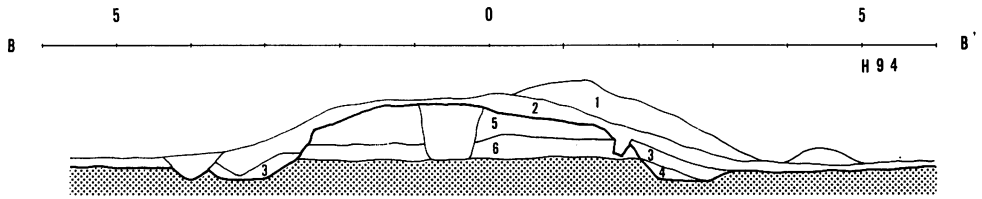
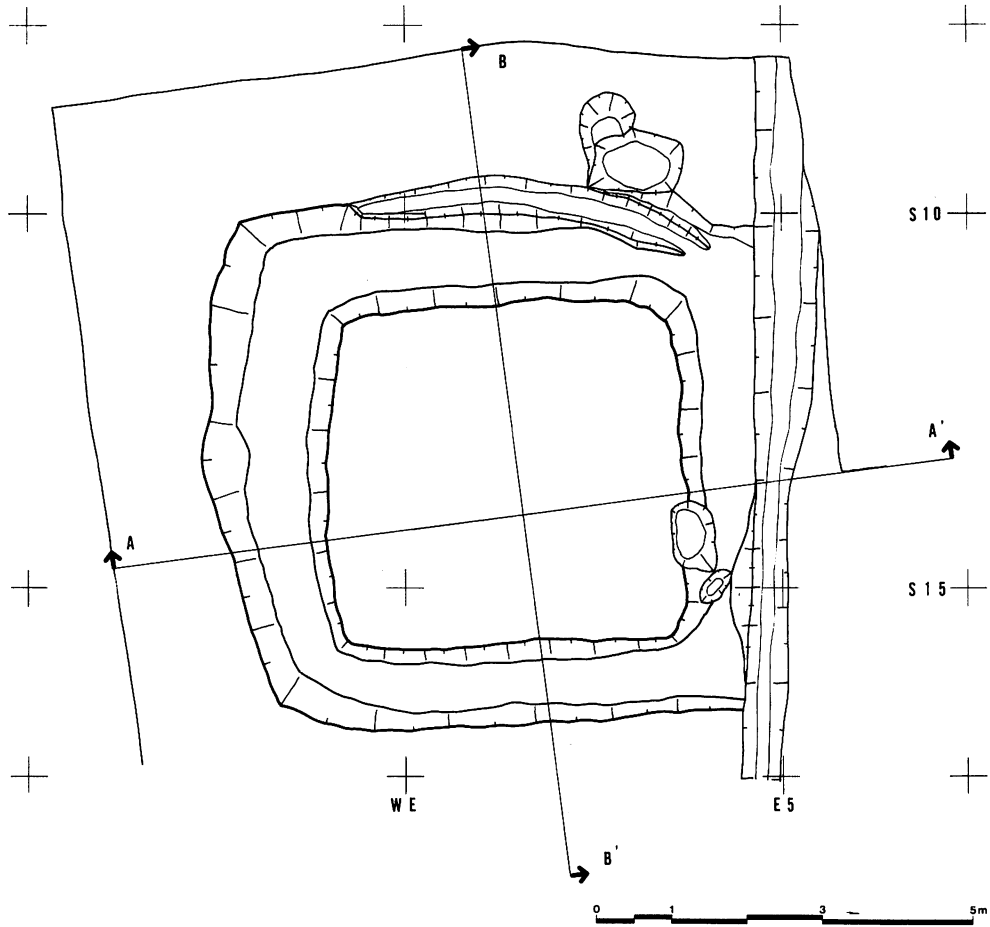


图30 7号平面、断面图



図31-1 7号現況(西から)



図31-2 7号現況(西から)



図32-1 7号全景(西から)



図32-2 7号A-A'断面(南から)

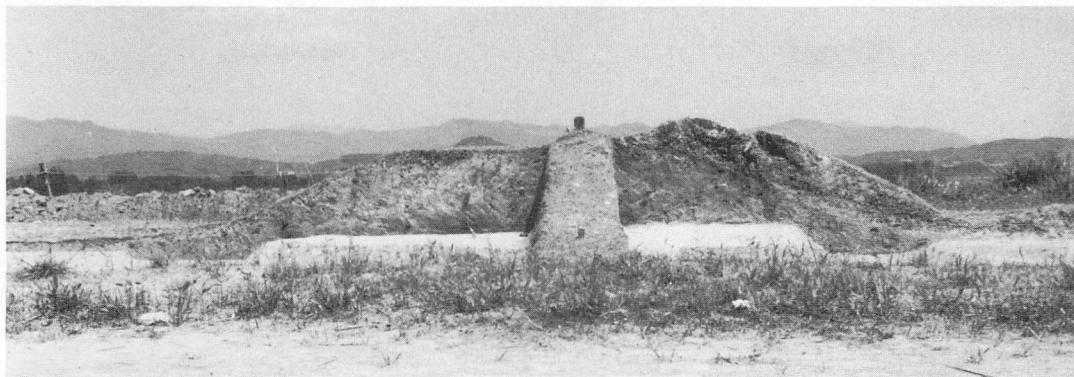


図32-3 7号B-B'断面(西から)

8. 8号塚 (南1号)

現況は笹竹が密生し、北側にはゴミ穴が多数重複していた。マウンド状の高まりはなく、平坦であるが、多少南側や西側よりは全体に高くなっている。

遺構は笹竹の根がビッシリつまった表土を約0.2~0.3mほどを除去すると検出される。塚の積土部分はすでになく、地山の切り出し部分が検出された。

塚の平面規模は東西方向が4.4m、南北方向が4.9mで隅丸の縦に長い長方形であると思われる。塚部分は南西部分の約半分の土が削られているため低くなっている。

周溝の巾は1.0~1.5mである。深さは0.1~0.18mほどで、わずかに溝が検出された。溝の北西部には大きな穴や溝があって攪乱されている。南部には水道管理設溝が掘られている。東部の周溝外法面は攪乱をうけて検出できなかった。

塚全体の向きは基準方向と同じで傾きがない。

出土遺物はない。

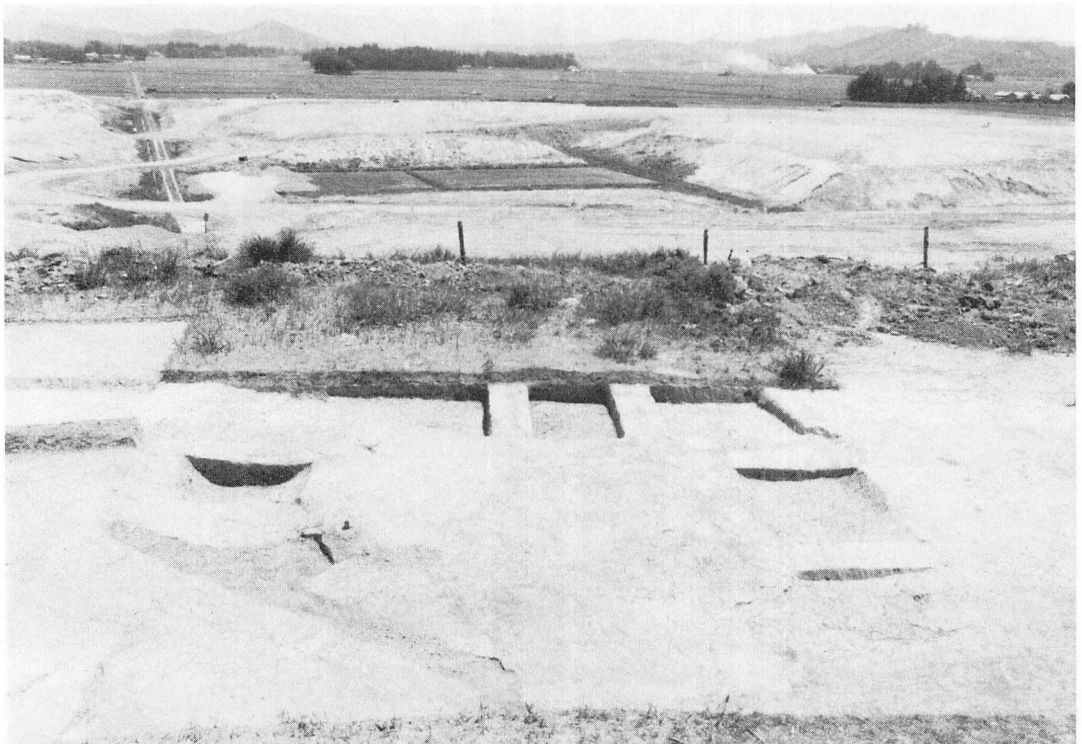


図33 8号全景(西から)

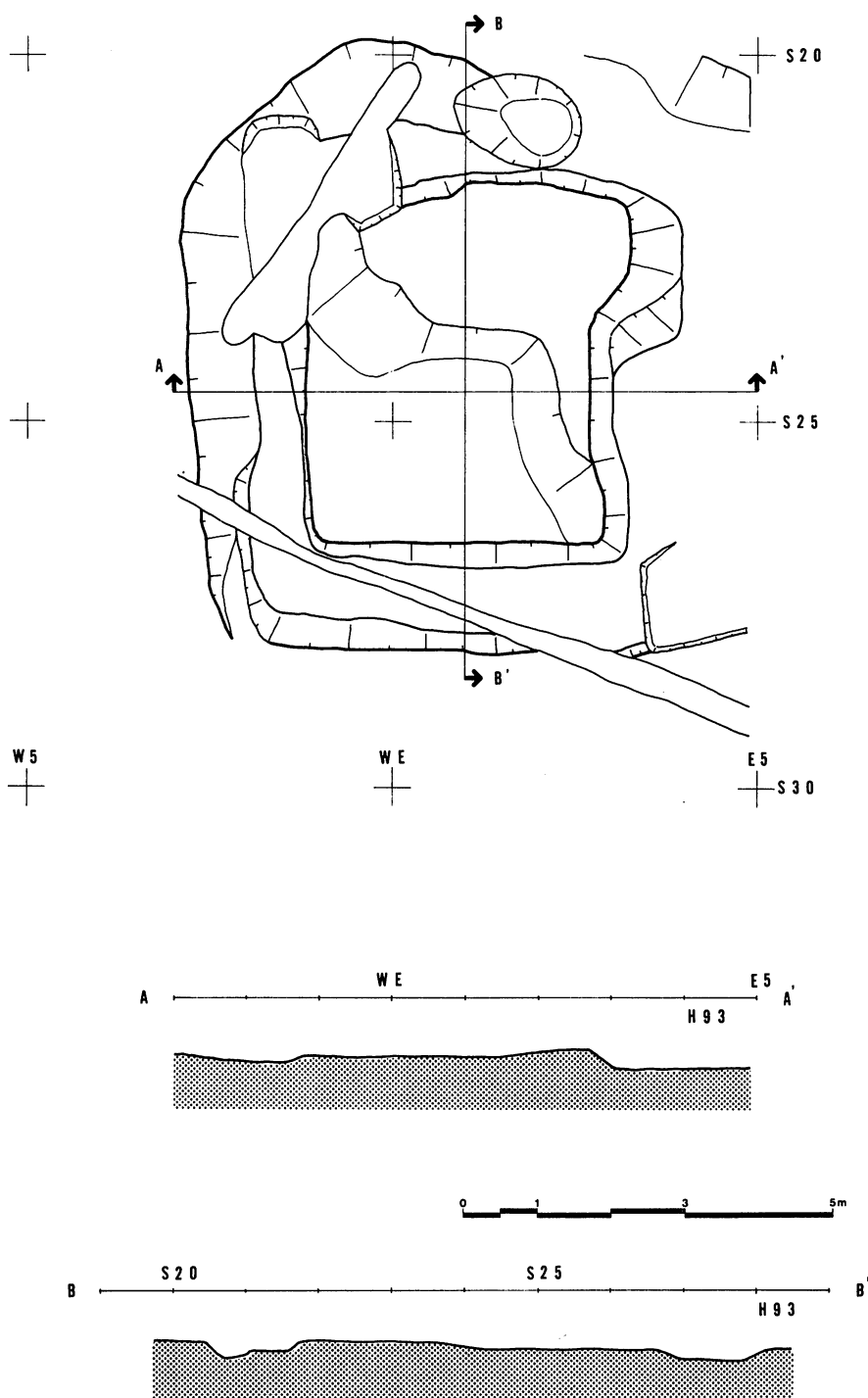


图34 8号平面、断面图

9. 9号塚（南2号）

現状は表土層はなく、切り土による整地がおこなわれていた。このために、現地表のよごれた土を0.05～0.1mほど削りとれば、そこが遺構検出面である。塚の積土部分はなく、地山の切り出し部分がわずかに検出された。

塚部分の西部分から南西部分にかけては検出できなかった。さらに、東中央部分には穴が重複し攪乱されているなど、本来の形を残していないようである。

塚の平面規模は東西方向が3.7m、南北方向が5.3mで隅丸の縦に長い長方形になるようである。周溝は巾が1.2～1.5mである。深さは0.08～0.09mと、かすかな痕跡でしかなかった。周溝の南部中央付近から東部中央にかけて水道管理設溝が掘られてある。この埋設溝は塚の南東隅で折曲っているのので、埋設溝が掘られた時には塚部分の積土が存在していたものと考えられる。

塚全体の向きは基準方向と同じで傾きがない。出土遺物はない。



図35 9号全景(西から)

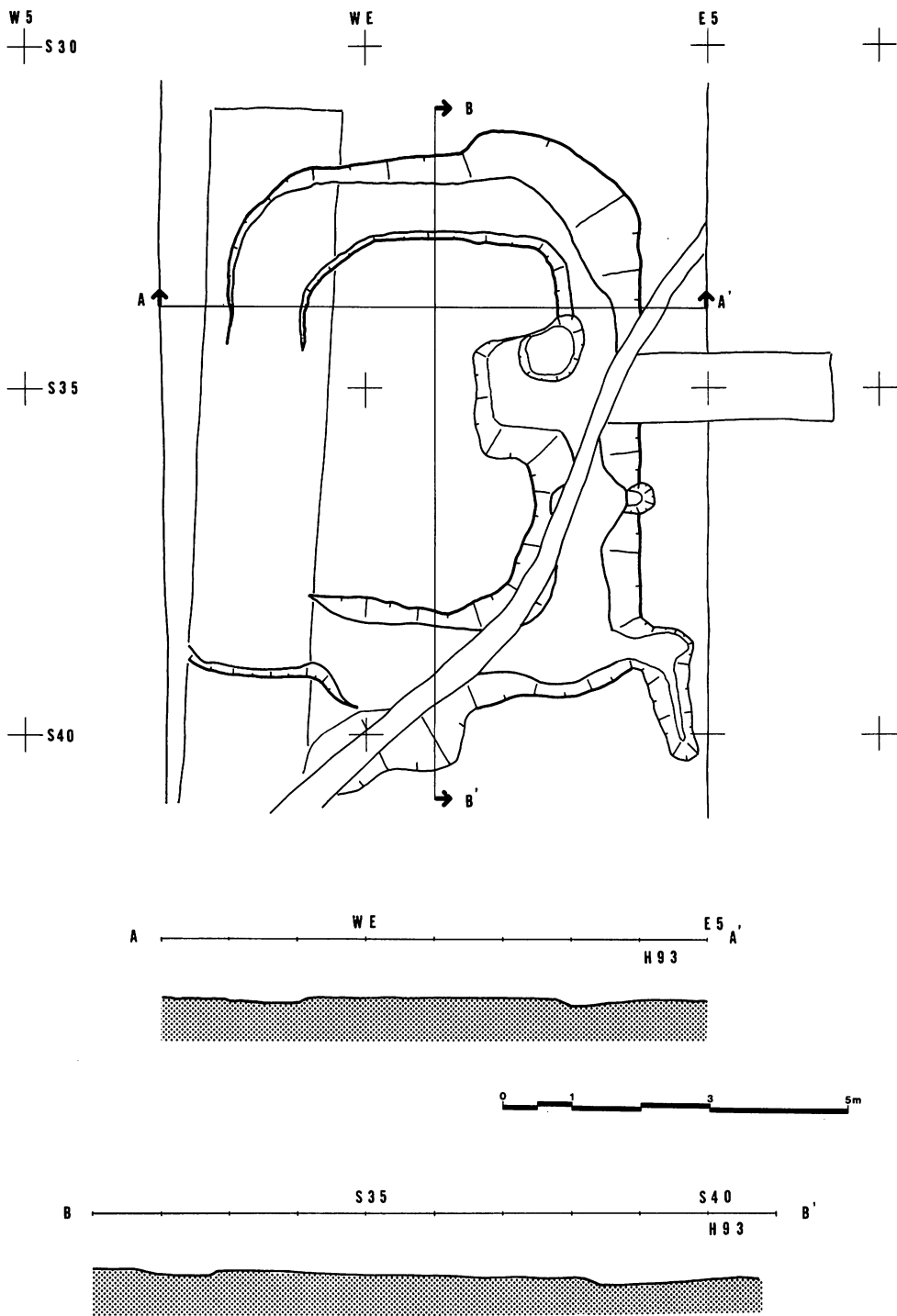


图36 9号平面、断面图

10. 10号塚 (南3号)

現状は表土層がなく、切り土による整地がおこなわれていた。このため、現地表面のよごれた土を0.05～0.1mほど削りとれば、そこが遺構検出面である。塚の積土部分はなく、地山の切り出し部分がわずかに検出された。

塚部分の北西部分を中心にした範囲が検出できなかった。全体としては、南部分の3分の2ほどが一段と低くなっている。

塚の平面規模は東西方向で3.6～3.7m、南北方向で4.7mであるから、東西3.7m、南北4.7mの隅丸の縦に長い長方形であったと思われる。

周構は巾が1.3～1.7mである。深さは0.12～0.15mであった。周構の西部は溝の外側法面が検出できなかった。北東部分には穴による攪乱がある。

塚全体の向きは基準方向に対して約3°西に傾いている。

出土遺物はない。



図37 10号全景(西から)

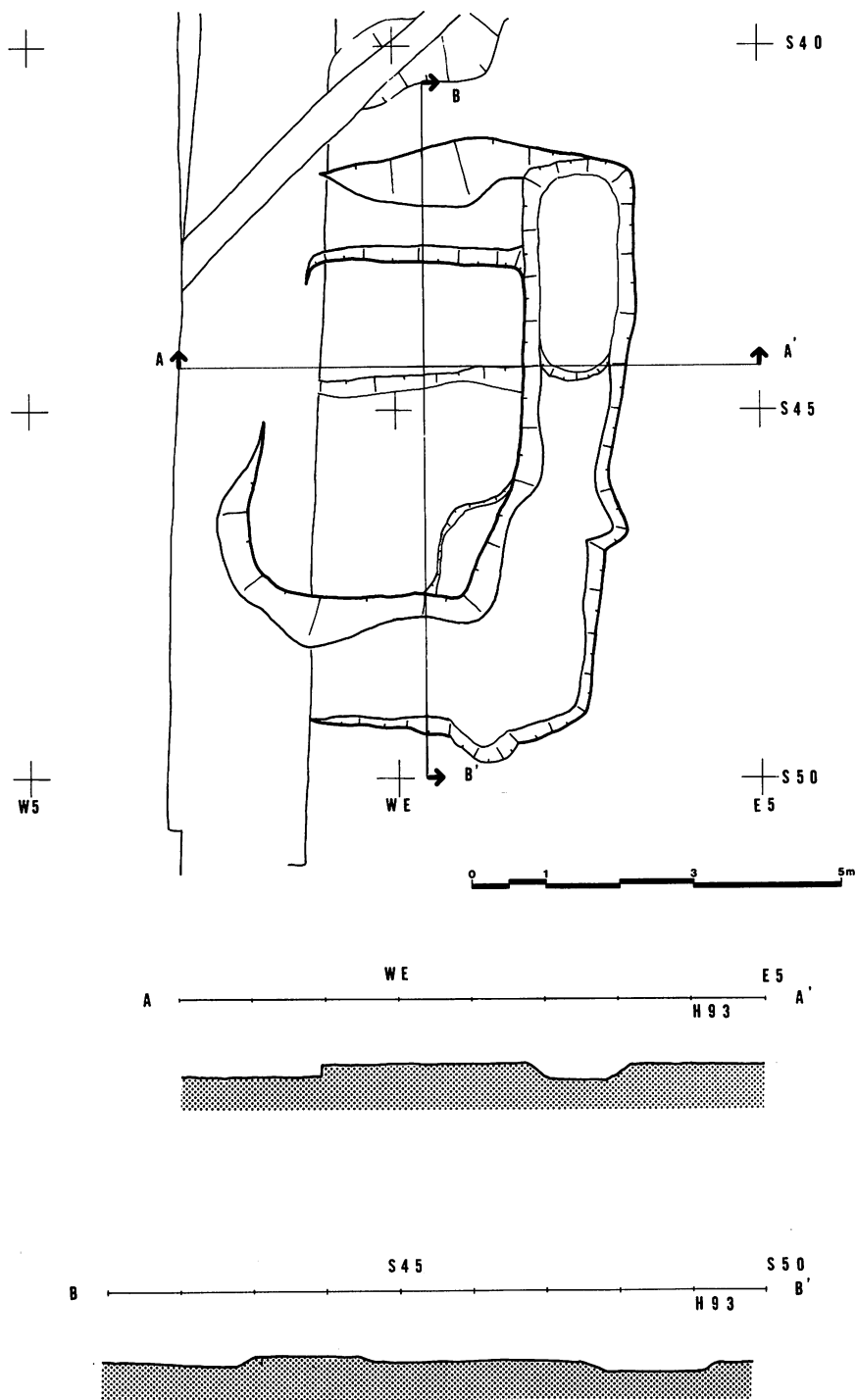


图38 10号平面、断面图

11. 11号塚 (南4号)

現状は表土層がなく、切り土による整地がおこなわれ、さらに土砂採取のときトラックの通路となったため厚く砂利舗装されていた。このため、地表面は硬く、荒れているため遺構の保存状況は良くない。南側には排水溝が掘られてあった。

遺構は、砂利と地表面のよごれた土を0.1~0.15mほど削りとれば検出できる。塚の積土部分はなく、地山の切り出し部分が検出された。地表面は非常に荒れているので、土層断面観察のためトレンチを掘り、平面観察と並行して遺構の検出、確認をおこなった。

塚の平面規模は東西方向で5.5m、南北方向で5.7mと隅丸の方形である。

周構は巾が1.0~1.4mである。深さは0.06~0.13mであった。

塚全体の向きは基準方向に対して約12°東に傾いている。

出土遺物はない。



図39 11号全景(西から)

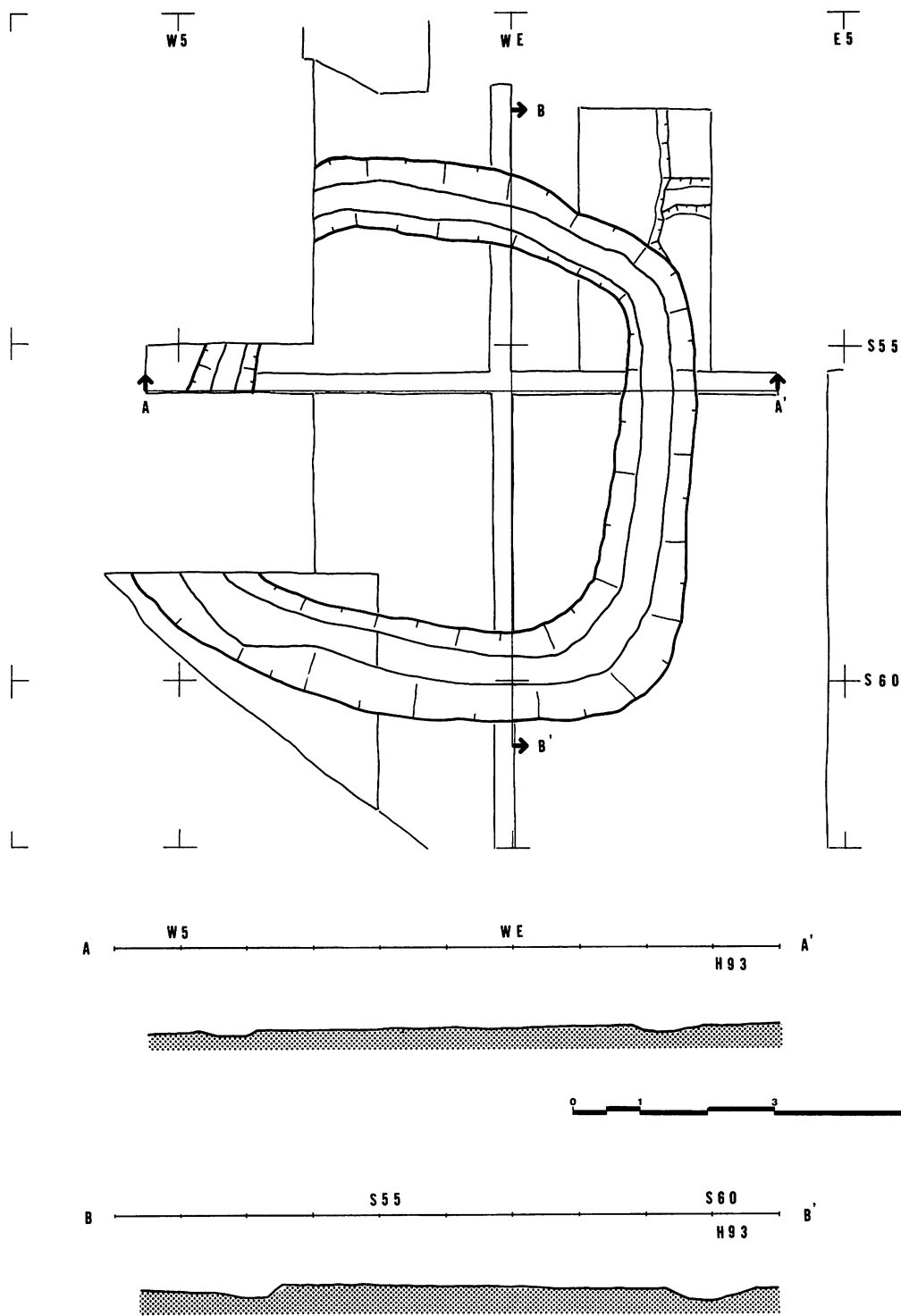


图40 11号平面、断面图

12. 12号塚 (南5号)

現状は表土層がなく、切り土による整地がおこなわれ、さらに土砂採取のときトラックの通路となったため厚く砂利舗装されている。このために、地表面は硬く、荒れているため遺構の保存状況は良くない。北側には排水溝が掘られ、南側は一段と深く土が削りとられている。

遺構は、砂利と地表面のよごれた土を0.1~0.15mほど削りとれば検出できる。塚の積土部分はなく、地山の切り出し部分が検出されている。

塚の平面規模は東西方向で5.3m、南北方向で5.4mの隅丸方形になる。塚の南部はブルドーザーで一度削られており、北東部も攪乱をうけている。

周溝は、わずかに北西部で外法面が認められるだけで、南西部や東部には水道管理設溝が掘られ、その他の部分でも整地等のため削りとられてしまい検出することができなかった。残存部での巾は1.1~1.7mである。深さは0.03~0.18mであった。

塚全体の向きは基準線と対して約10°東に傾いている。出土遺物はない。



図41 12号全景(西から)

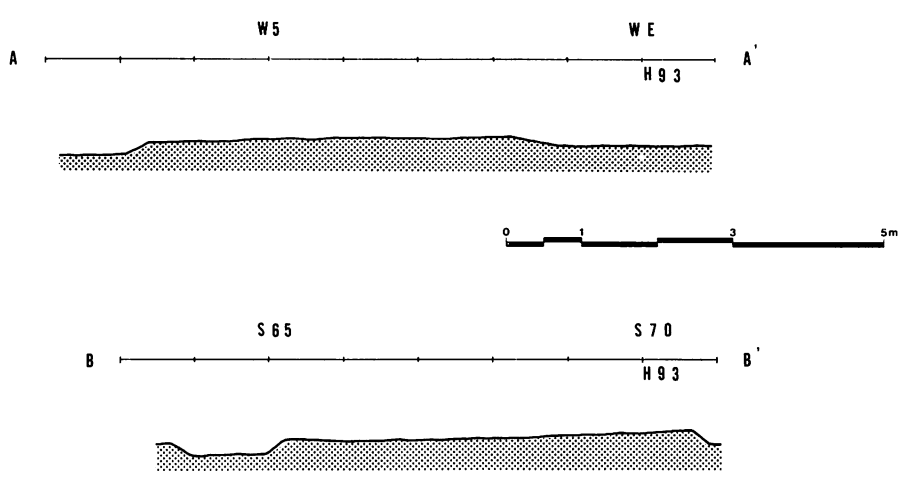
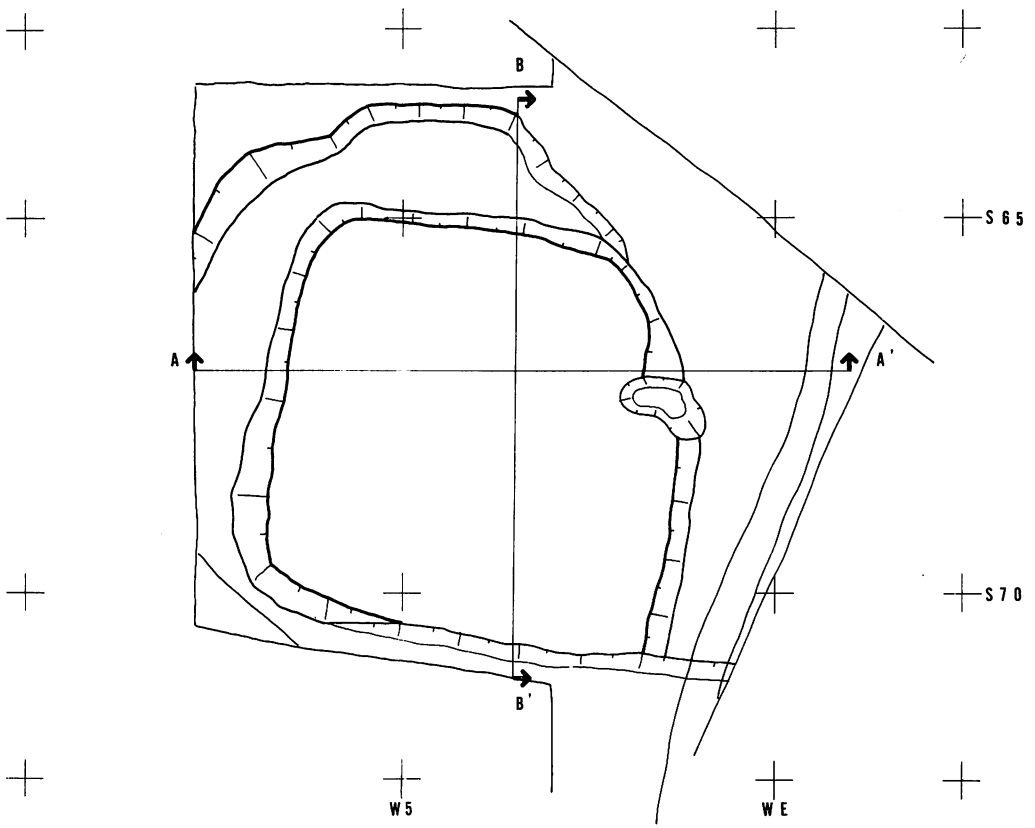


图42 12号平面、断面图

V. 遺物

出土遺物は銭貨7枚と小銃の弾1個の合計8点である。

- R-1 桐一銭銅貨 大正12年(1923)
 7号 塚表土上面出土 径23.2mm 厚1.4mm 重量3.64g
- R-2 新寛永銅銭(元文期出羽国秋田鑄大字降水) 初鑄元文3年(1738)
 7号 周溝埋土上面出土 径23.4mm 厚1.0mm 重量2.55g
- R-3 桐一銭銅貨 大正11年(1922)
 7号 周溝埋土上面出土 径23.2mm 厚1.35mm 重量3.35g
- R-4 新寛永銅銭(元文期江戸深川十万坪鑄虎ノ尾寛) 初鑄元文1年(1736)
 7号 周溝埋土上面出土 径23.3mm 厚0.9mm 重量2.21g
- R-5 小型五十銭黄銅貨 昭和23年(1948)
 6号 塚表土上面出土 径19.0mm 厚1.5mm 重量2.58g
- R-6 寛永銅銭(火熱により約1/3を欠損し、変形している。)
 6号 周溝埋土上面出土 径26mm 厚1.5mm 重量1.88g
- R-7 十銭白銅貨 大正10年(1921)
 5号 周溝埋土上面出土 径22.1mm 厚1.4mm 重量3.46g
- R-8 小銃の弾(弾頭はさびてポロポロになっている。)
 7号 塚表土中出土 全長75mm 最大径12mm 重量13.2g

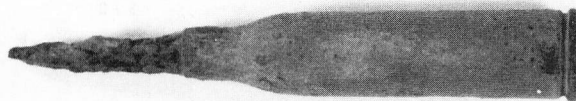
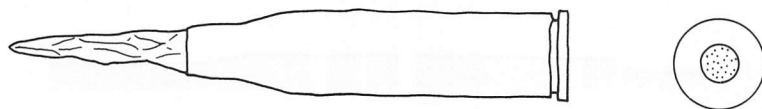


図43 出土遺物・小銃の弾

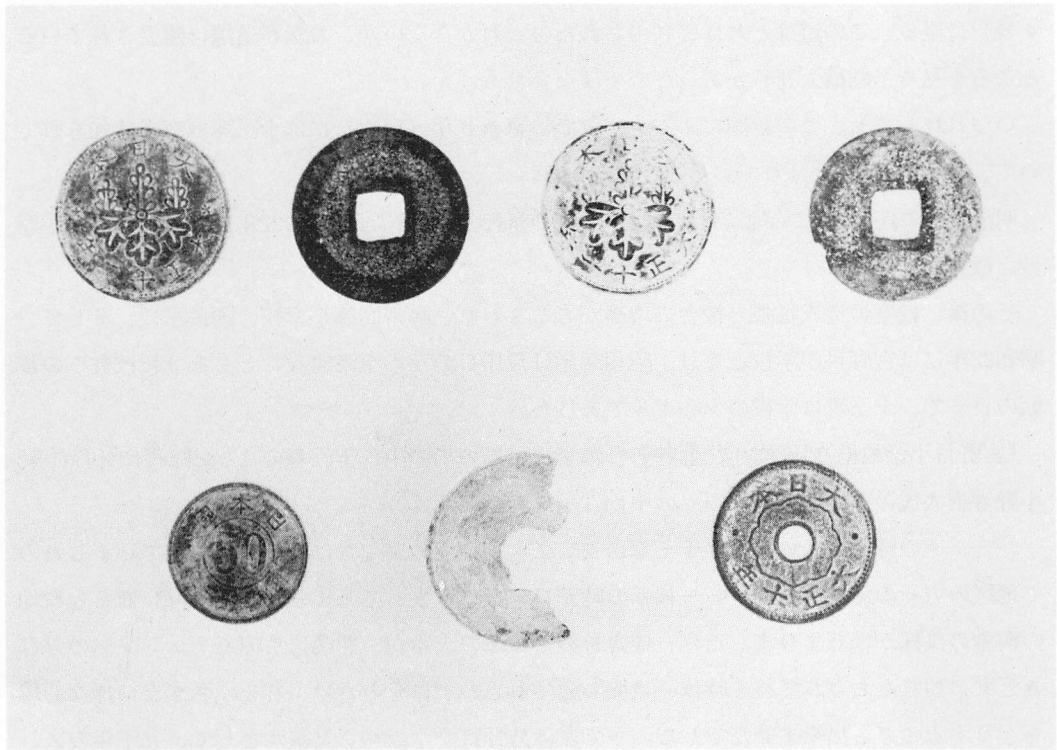
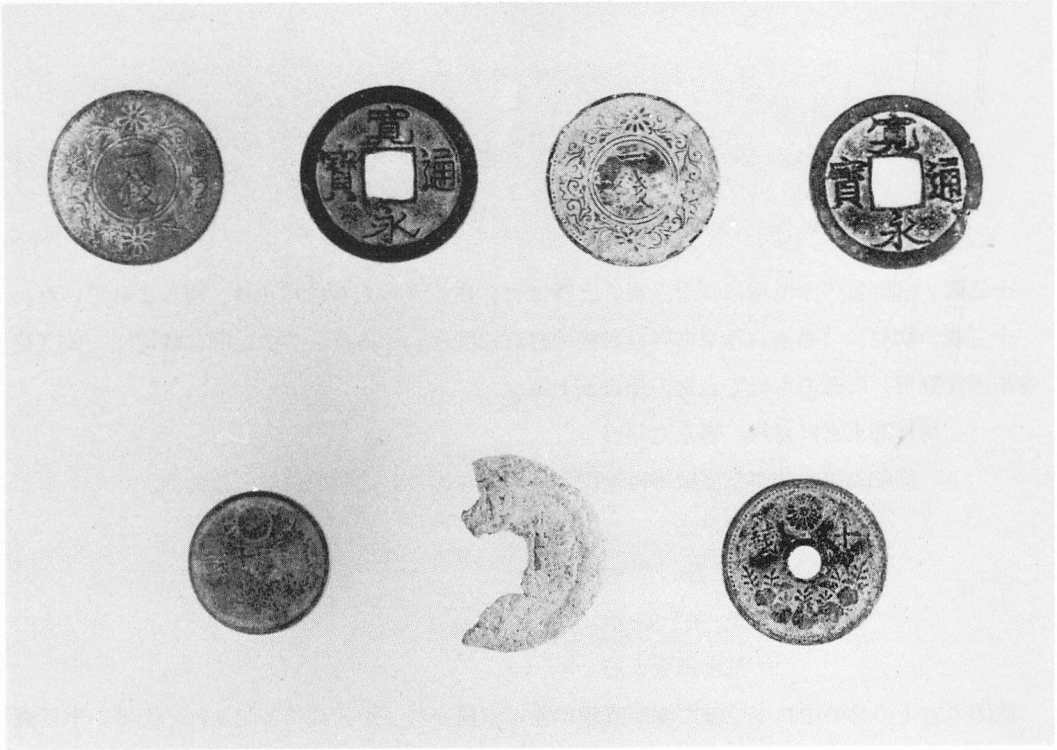


図44 出土遺物・銭貨

VI. ま と め

十三森 宮野目の十三塚は「十三森」と呼ばれ、古くから人々に知られ、親しまれていた。十三森の初見は「嘉永六年東宮野目村検地打直絵図面」である。この絵図は駿河庄一氏（花巻市西宮野目）所蔵のもので、次の墨書がある。

稗貫郡東宮野目村 嘉永六年春

郷邸為御吟味竿打直被御付候砌 御調吟味出役 廻村取調候 絵図面。

御雇御勘定方

工 藤 門 吉 印

大 矢 文 治 印

荒木田金太郎 印

絵図の右下の林の中に十三基の塚が直線に並んで描かれ「十三森」と記されてある。十三森の左下には「馬頭観音」と記されてお堂がある。このお堂の鳥居の前に道があって、その道は段丘の上に上がり、塚の左から3番目と4番目の間を通り、さらに林をぬけて函館街道（国道4号）に至る。この道はどれほど利用されたのかわからないが、お堂が道端に建立されているところを見ると結構人通りがあったのではないだろうか。

いづれにしても、この絵図によって、すでに嘉永6年（1853）には十三塚の存在は知られていて、「十三森」と呼ばれていたことがわかる。

明治20年に十三森のこの地に羽々尋常小学校の新校舎が建てられ、明治22年には宮野目尋常小学校と改称した。

その後、校庭の造成拡張と校舎の増築がおこなわれ、尋常高等小学校、国民学校、そして、昭和22年には宮野目小学校となり、昭和38年11月19日の花巻空港建設にとまなう新校舎への移転の日まで、十三森は学校のシンボルであった。

『宮野目小学校創立100周年記念誌』には学校の思い出の中に十三森のことが随所に見られる。小野寺吉人氏の「校舎移転の頃」の中から一部を紹介しよう。

——その輝やかなしい伝統と十三森にかこまれた環境の美しさは県下一を誇っていましたが、地区の方々の愛着も深く——移転の時が日一日とせまって来ました。二学期になると校地の樹木の伐採がはじまりましたが、校舎をめぐる桜の大き木が、悲鳴にも似たチェーンソーのひびきと共に切りたおされて行く時は、生徒も先生も思わず目をおおい、耳をふさぎたい様な心境をどうすることも出来ませんでした。さて次は宮野目小学校のシンボルとして、九十年の久し

きにわたって、朝に夕に仰ぎ見た十三森の老松の番です。――

十三森の調査 研究 宮野目十三塚が調査、研究の対象となってからの記録は知り得たかぎりでは次のとおりである。

1. 史跡名勝天然記念物調査報告第2号 岩手教育委員会 大正11年度調査

この報告の中に次の文があった。

1. 名称及び所在地

(イ) 十三森。宮ノ目村大字宮野目第1地割字幅下。

2. 由来伝記

(イ) 十三森。宮ノ目小学校に在り、現在の数十三個にして二間許を隔てて一列に築かれたり。其の一個は小学校新築の際発掘せられたるが中より土器の破片及び、一厘銭数枚、鋏形の鉄片を出したるも、一品も保存せられたるものなきは遺憾なり。

2. 郷土史 続編 稗貫郡宮野目校編 昭和8年

謄写版印刷の本書に次の文がある。

十三塚 蝦夷塚であると言はるる十三塚は宮野目小学校を校庭を横切り南北に一列にならび各塚の上に生ゆる茂れる数本の松の古木は校舎に一段の風致を添えている。

一列の中央に大なる塚あり其れよりやや小さい塚は北に六つ南に六つ而かも等間隔を以てならんでいるのである。

3. 花巻史談第5号 昭和11年

この会誌には及川晃氏の「宮野目踏査記」という文がある。ところが、本文中には十三塚の記載はなく、十三塚の写真だけが1枚掲載されてある。

4. 花巻市の文化財第3集 花巻市教育委員会 昭和36年

十三塚について、所在地、所有者、管理者、現状並びに保存管理の状況、附帯調査事項、その他参考事項、所見があつて全体に長文であるので、現状がわかる部分だけを引用する。

宮野目小学校を横切り南北に一列にならんでいる。南端の塚は形がなくなり、三番目のものは小学校への通路にあつたためこわされているが、他の11はあるいは形がくずれ、あるいは変形してはいるが見ることが出来る。

八番目のものがやや大きく、塚の上には松の木が生えているが、松の木の生えていないもの、桜の木が生えているものがそれぞれ一つある。径は2mないし、2.5mの方形で、高さは約1mで、5m位のやや等間隔で並んでいる。この辺を地元の人々は且つては「十三森。」と称したそうである。

5. 花巻市文化財調査報告書第3集 花巻市教育委員会 昭和52年

この報告書とは熊谷章一氏の「十三塚考」がある。十三塚の状況については上記の文献以上の記載がないので内容の引用はしないが、十三塚にかかわる伝唱がよく整理されている。

調査のまとめ 今回の調査で積土の現存する塚が3基確認され、さらに、周溝によって所在の確認された塚が9基で、合計12基の塚を検出確認することができた。

本来は13基であったはずだが、どうしても13基目を検出することができなかった。「花巻市の文化財第3集」によれば、13基目は南端で検出されることになる。一方、「郷土史続編」の記載や十三塚の中央に大塚を配置する事例が知られているが、この例に該当するとすれば13番目は北端で検出されることになる。

12基の塚はほぼ直線上に配置されている。調査時においては方向角 $19^{\circ}32'07''$ を基準方向として座標を設定したが、調査の結課、1号と12号の各々中心位置を通る直線が全体の中心線として最も適当であることがわかった。この直線はKL-2にさらに $3^{\circ}25'06''$ 追加した $22^{\circ}57'13''$ の方向角で示される。

この中心線(KL-3)と各塚の位置関係は、1. 2. 3. 4. 5. 6. 12号がほぼ直線上にのるが、7. 8. 9. 10. 11号はKL-3に対して2.5m 東に平行移動した線上にのることが注目される。

全長は117.4mあり、各塚との間隔は、塚の中心から中心までを測定すると(図47-1)のようになる。6号の大塚の前後は12.9mであるが、これを除いた北の方の平均が9.3m、南の方の平均が11.0mと多少の差があり、南と北の平均は10.2mである。

各塚の大きさは、6号が $5.8\text{m} \times 9.2\text{m}$ と大型であるが、他の塚は平均すると5.0mになる。

周溝は素掘りの溝で、溝に特別何も施設をしていない。溝の巾は6号を別にして平均で11.6m 深さは、5号、6号の平均が0.23m、その他は平均0.11mであった。

(図47-2)において各塚の間隔、大きさなどの平均値で、基本設計図を作り、実際の検出状況と比較してみた。

塚の積土は5号、6号、7号にしか残されていなかった。断面での観察では塚を作る手順や方法には塚毎のちがいはない。最初に旧表土の上にそのまま旧表土を主体とする土が積み上げられている。5号、7号はこの土が一面に積み上げられているが、6号は塚の周辺部、つまり周溝側にドーナツ状に積み上げられている。そして、その次は旧表土下の土(基本土層の第II層)が積み上げられ塚全体を作り上げていて、他の土は混じっていない。積み土をならしながら固めるようなことはしなかったと見えて、版築状の水平互層は見られない。

積み土の途中や、塚の底面、および底面下に遺物の出土はなく、又遺物等の埋設を目的とする施設の痕跡も認められなかった。

積み土の高さは0.6~0.8mが残されていた。本来の高さがどのくらいであったかを知ること

はできなかったが、次の二点のことが考えられる。

まず、塚に最初に積み上げられた旧表土を主体とする土は、塚部分の面積と周溝部分の面積がほぼ等しく、又、溝の深さと、最初の積み土の高さがほぼ等しいことから、周溝を掘り上げた土を用いた可能性がある。

次に、さらに上に積み上げられた土であるが、これは最初の積み土の数倍の土量が必要であり、積み上げられた土にほとんど他の土が混ざっていないので、あまり遠くない所から集中的に土取りをしたものと考えられる。

出土遺物は銭貨7枚、小銃の弾1個である。出土状況は塚の表土や表土の上面、周溝埋土上面からであった。塚を覆っている表土にはガラスや瓦片などが含まれていて、宮野目小学校開設以後に塚の上に盛り上げられたものであることがわかる。一方、周溝埋土上面は周溝が全部埋まってから後のことになるので、塚が作られた当時の遺物ではないことになる。

7枚の銭貨は寛永通宝から昭和23年の五十銭黄銅貨までかなりの巾がある。これらの銭貨は十三塚が地域の人々に古くから知られ、親しまれていたことから十三塚への供献のための賽銭であったと思われる。

特異な遺物として小銃の弾がある。これは宮野目小学校に青年学校が併設されていたため、軍事教練や査閲などが校庭でおこなわれたことによるものと考えられるが、その当時紛失されたものであろうか。

本調査によって宮野目十三塚に関するいくつかの事実が明らかとなったが、なお、いくつかのしかも基礎的な問題については不明のままである。

まず、十三塚が何時作られたのかという問題である。調査の結果では遺構にも、遺物にも手懸かりを得ることができなかった。

又、さらに、塚が十三基同時に作られたのか、一基ずつ、あるいは数基ずつ、一定の時間をおいて作られたものなのかについても不明であった。塚を作るときの計画性ともかかわり合っているが、直線上での位置、塚の間隔、各塚の形と大きさ、各塚の向き、など各々多少のバラつきがあることはすでに報告のとおりであるが、このバラつきをもって時間差があるとも考えられない。

次に誰れが、何のために塚を作ったかという問題がある。塚に積み上げられた土量を考えると1人や2人の人によって作られたものでないことはわかるが、今回の調査によってこの問題に答えることはきわめて困難である。
(国生 尚)

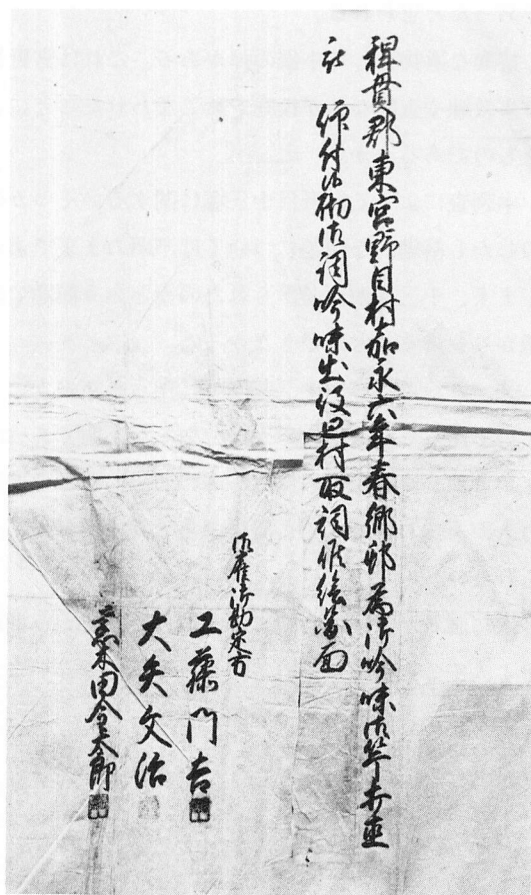
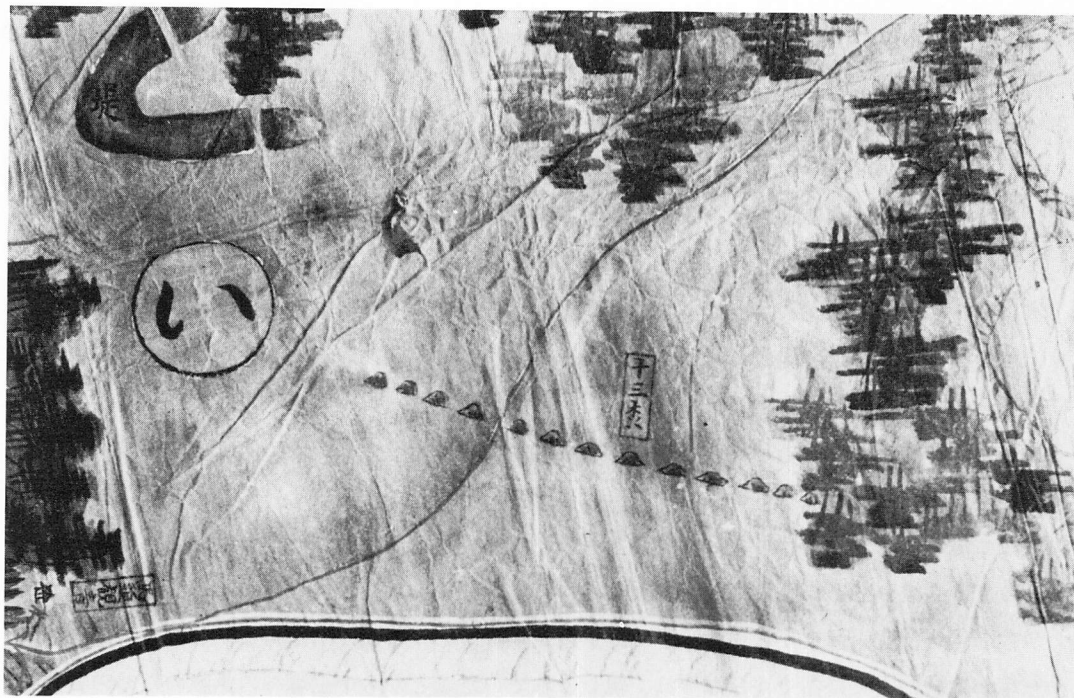


図45 検地絵図

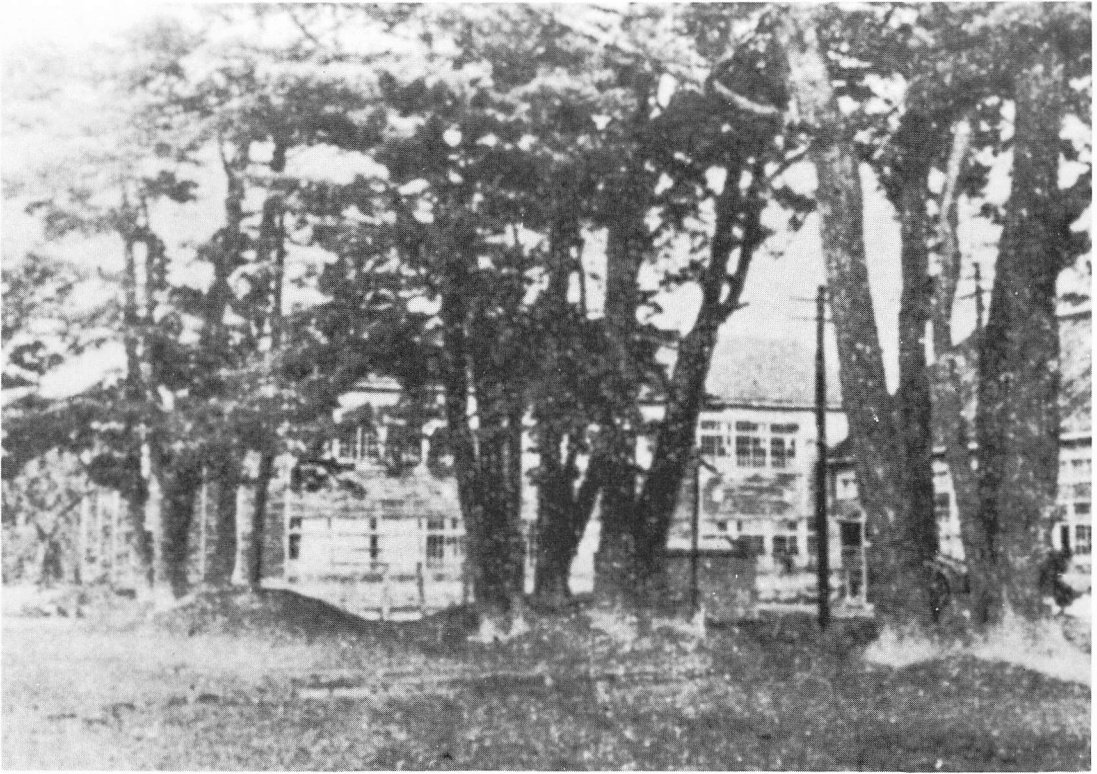


図46-1 宮野目小学校当時の十三森(西から)



図46-2 宮野目小学校当時の十三森(南西から)

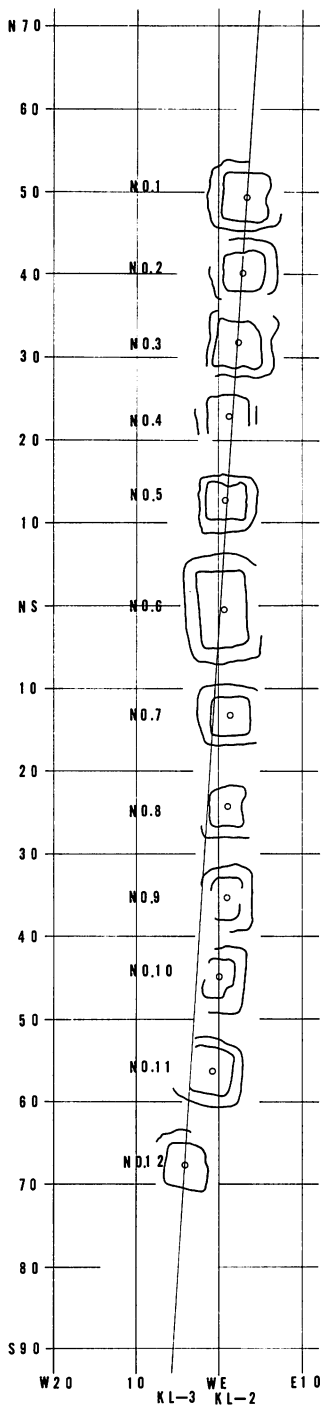


図47-1 塚の間隔

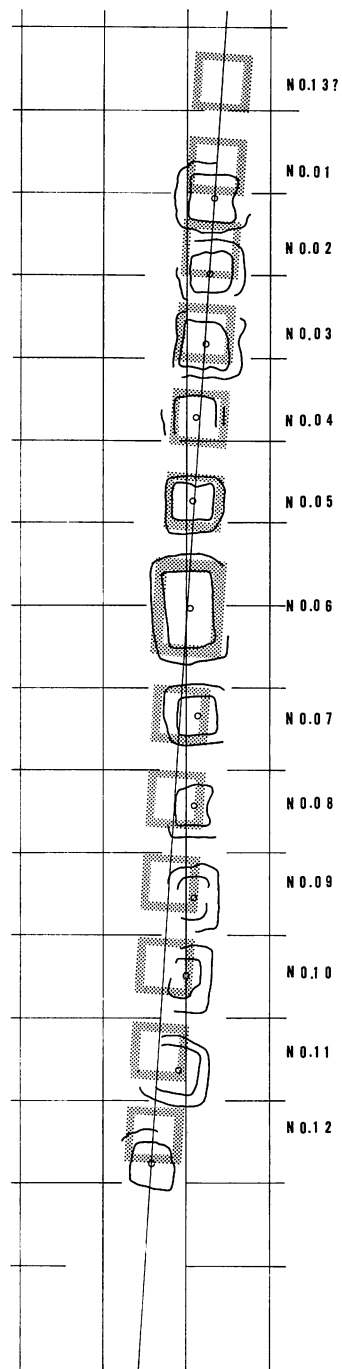


図47-2 塚の平均的位置との関係

岩手県埋文センター文化財調査報告書第37集
宮野目十三塚発掘調査報告書

印刷 昭和57年2月10日

発行 昭和57年2月10日

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185
TEL (0196) 38-5820, 9001, 9002

印刷 山口北州印刷株式会社
